SKY　EARTH

齋藤ノベオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＫＹ　ＥＡＲＴＨ

【Ｎコード】
Ｎ１３２３Ｚ

【作者名】
齋藤ノベオ

【あらすじ】
　エネルギー資源が枯渇した世界。人々は資源が残された地域に密集し、その資源を巡って対立の溝を深めていた。そんな中、ある国が他国に向けて侵略を開始する。拡大する戦火の中で、戦闘機に変わって生み出された生物兵器「ドラゴン」を追う青年、復讐を誓う女、そしてたった一人の家族のために戦場を駆ける男。様々な思念が絡み合った時、真の闘いへの幕が開く。

試合開始

闘技場。

そこは、鳴り止まない歓声で埋め尽くされた娯楽の場。しかし、選手達にしてみれば、敵対心という名の刃をむき出しにさせる舞台だった。

その闘技場の控え室で、一人の男がベンチに腰掛け、目を閉じていた。

男が出場する試合が始まるまで、残り五分を切っているというのに、誰も控え室まで呼びに来ないのは、この男が常連だということを物語っている。

男は試合開始三分前になると目を開き、あらかじめベンチに置いておいた自分の「商売道具」を身に付けていく。

防弾チョッキを着込み、腕と足の関節にサポーターを着けていく。左腕には防弾・防爆・防刃の三拍子が揃ったシールドを取り付ける。太ももものレッグホルダーにはハンドガンを装備し、腰にはナイフを巻きつける。背中に一メートルほどのブレードを背負い、最後に右腕でアサルトライフルを持ち上げた。

常人では立ち上がることすら不可能なこの重装備を、男は強靭な肉体を駆使して使用する。

装備が整った男は、控え室を出て、選手入場口であるターンテーブルまで歩いていく。すると、ターンテーブルへと続く廊下の向かい側から、よく見かける顔の男が歩いて来た。

男はそのまま無視して通りすぎようとしたが、案の定、話しかけられた。

「……あんたにとっちゃ、消化試合かもしれないが……」

「……」

「俺にとっては、良い判断材料になる。あんたと闘うためのな」

「……闘う？　殺すの間違いじゃないのか？」

「……こんなところでやられんなよ」
男はそう言うと、最後に「見てるからな」と付け加え、去っていった。
男は、たった今去っていった男の試合中継を、見たことがあった。マーカスと呼ばれるその男は、いずれの試合でも相手選手を殺してしまうそうだ。
出来れば、あたりたくない相手だ。男はそう考えながらターンテーブルに辿り着く。
この位置からでも観客の歓声が届いてくる。
観客の大多数が自分の名を呼んでいるにも関わらず、男が考えていることはいつも一つだった。
「ホリー……、今日も必ず帰ってくるからな……」
男は、目の前に用意されているターンテーブルに足を踏み入れ、その時を待った。

「レディース、アンド、ジェントルメン！　『ゲオルギウス』にお集まりの皆さん！　今日も素晴らしいカードが組まれました！　ぜひ注目していってください！　それでは、選手入場！」
男の乗っているターンテーブルが起動し、闘技場の広大なフィールドへと上昇していく。
観客達は男の姿がフィールドに現れると同時に、一斉に歓声を上げた。
それと同時に、その歓声に負けない位の声量で、実況の男がマイク片手に解説する。
「その通り！　皆さんご存知のベルトウェイ・ゴールドマンが今回の防衛戦の主役です！　身長百八十八センチ！　体重九十五キロ！　筋骨隆々の大男！　ゲオルギウス初参戦から無敗の四十四連勝！　不屈の精神と強靭な肉体を持つこの男を止めることは出来ないのか！？」

相変わらず前置きの長い実況の男を尻目に、ベルトウェイは今回のフィールドを見渡す。

天気は晴天、曇一つ無い昼下がりの午後だ。

いつものごとく、丁度サッカーフィールド一個分の広さのフィールドには、高さ一メートル半ほどの遮蔽物が、点々と置いてあるだけだった。地面は、学校にあるグラウンドとさして変わらない砂となっている。

今回は、この遮蔽物に身を隠しながら闘えということか。

ベルトウェイは、試合開始と同時に移動するポイントを決めていた。

見たところ頑丈そうなコンクリートで出来ているが、それは相手の武装によって変わってくる。ベルトウェイは相手側の入場口を見つめた。

「しかし！　たとえいくら不屈のベルトウェイ選手であっても、今日の試合結果は予測出来ませんよ！　今回の挑戦者はこちらです！　どうぞ！」

そのアナウンスと同時に、相手側のターンテーブルが上昇してくる。

現れたのは、子供だった。

しかも、女。

観客の落胆の声が、一斉に響き渡る。

そんな観客の落胆を見透かしていたのかのように、実況の男が声を張り上げた。

「皆さんの言いたいことはわかりますとも！　確かに初めて彼女を見たときには私も驚きました！　思わず観客席までお戻り頂こうと考えたほどです！」

そこで闘技場が少し沸く。観客の興味が自分に戻ってきたところで、実況の男は続ける。

「しかし！　人は見た目によりません！　今から言うこの一言でご理解頂けるでしょう！　彼女は先日、ゲオルギウスランク『十五位』

に認定されました！」
その瞬間、闘技場全体がどよめきたつ。
ベルトウェイも、この発表には驚いた。
民間の娯楽として機能しているゲオルギウスという競技は、対戦のカードのバランスが狂わないよう、選手達の成績に応じてランク付けがなされている。
ランクの数が少ないほど強く、逆に多いほど弱い順になっているため、実力の差が開かない仕組みになっていた。
ベルトウェイのランクは十四位。全世界の選手を合わせると二百人近くいると言われるゲオルギウスの競技人口の中では、間違いなく上位に位置づけされる。
対して、少女のランクは十五位。四十三戦無敗のベルトウェイが十三位ということは――。
「今回の挑戦者、名前はイーリス・サングネイアちゃん！　年はゲオルギウスの年齢制限ギリギリの十八歳！　身長は百六十二センチ！　体重は言わないでおきましょう！　そんな彼女に付けられてしまったあだ名は、『ボマー』です！」
「ボマー……」
ベルトウェイはイーリスの武装を確認する。
しかし、イーリスがその体格に似合わない厚手のトレンチコートを羽織っているせいで、見た目からは判断出来なかった。
「ルールを説明します！　制限時間は十分！　持ち込める物は『個人で携帯出来る物』なら何でもＯＫ！　勝敗条件は相手選手がギブアップ、もしくは十秒以上地面に背中がついていた場合、そして死亡した場合です！　ですがいくら死亡がカウントに入るからといって、戦意喪失した相手に向かっての攻撃は許されません！　一応『競技』ですのでスポーツマンシップにのっとって行ってください！
それではスタンバイ！」
アナウンスが終わると、一気に闘技場が静まり返る。
天井近くに設置してある巨大スクリーンに、大きく「Ｒｅａｄｙ」

の文字が表示された。
どちらにしても、手早く終わらそう。
自分のためにも、少女イーリスのためにも、そしてホリーのためにも。
巨大スクリーンに大きく「Ｇｏ」の文字が表示された瞬間、ベルトウェイは一番近くにある遮蔽物に身を隠した。
「おっと！　ベルトウェイ選手！　さっそく遮蔽物に身を隠す戦法をとりました！」
これでしだいに距離を詰めていけば、接近戦に持ち込める。
ベルトウェイは次の遮蔽物に向かって飛び出そうとしていた。するとその時、イーリスのいる位置から、バシュンっと、何かが飛び出してくる音がした。
急いで確認すると、ロケットランチャーの弾頭が、こちらに向かって来ていた。
ベルトウェイは次の遮蔽物へと飛び込んだ。
すると、ついさっき自分の居た遮蔽物が、爆風と共に砕け散る。
間一髪、左腕のシールドを展開したベルトウェイは、飛んでくる破片に身を晒さずに済んだ。
「恐ろしい！　何ということでしょうか！　少女の細腕に似合わない重火器が火を噴きました！」
ベルトウェイは、遮蔽物から右腕だけ出すと、アサルトライフルの弾丸を周囲にばら撒く。するとそれに応じるかのように、何かが風を切って自分の方に飛んで来た。それを確認したベルトウェイは、またもや別の遮蔽物に飛び込む羽目になった。
手榴弾だ。
おかげでまたも、ベルトウェイはシールドの世話になる。
「挑戦者イーリス！　ベルトウェイ選手を寄せ付けません！」
ボマーか……、分かった気がする。
ベルトウェイは一人で納得すると、次から次へと遮蔽物を変えていく。それを追うようにイーリスも、グレネードランチャーを連射

してきた。
フィールドの遮蔽物が、瞬く間に爆破されていく。
しかし、それと同時にイーリスは、ベルトウェイとの距離が縮まっているのに気付いた。
ベルトウェイはアサルトライフルを投げ捨てると、整った顔立ちに焦りを見せ始めたイーリスに対して、遮蔽物越しにハンドガンを連射する。二、三発の銃弾がトレンチコートに命中したが、まるで衝撃を吸収されたかのように地面に落ちただけだった。
そしてイーリスも、近くの遮蔽物に隠れる。
どうやらあのトレンチコートは、俺のシールドと同じく防弾らしい。
「接戦です！　誰がこの展開を予想出来たでしょうか!?」
しかし、あのコート……、防弾の上に重火器を収納しているのか？
「ベルトウェイ選手！　決定打を見失っています！」
確かにコートの中に、見た目からは想像出来ない重火器を隠しておけば、初めて対戦する相手の意表を突くことは出来るだろう。だが、それでは少女の長所である身軽さが無い。
「イーリス選手！　またも重火器で攻撃します！」
ベルトウェイは、イーリスのいる遮蔽物へと全速力で駆け出した。
後方で爆音が鳴り響いているが、無視して腰のナイフを抜く。
「ああっと！　ベルトウェイ選手！　なりふり構わず突撃していく！」
ベルトウェイが迫ってきていることに気付いたイーリスは、急いでその場を離れようとする。しかし、飛んで来るナイフがイーリスの行く手を阻む。
そこでイーリスは、ロケットランチャーを構えると、向かってくるベルトウェイに向けて発射した。
観客が息を呑む中、ベルトウェイは近くにあった遮蔽物を踏み台にして、飛んできたロケットランチャーの弾頭を、飛び越えた。
そのまま背中のブレードを抜くと、唖然とするイーリスの喉元に

突きつける。
しばらくの静寂の後、イーリスは静かに両手を挙げた。
観客が、一斉に沸いた。
「と！　いうわけで今回の防衛戦！　見事にベルトウェイ選手の防衛成功です！　挑戦者イーリス選手の攻撃も目を見張るものがありました！　しかしそこは経験の差か！？　ベルトウェイ選手の勇気ある特攻によって幕を閉じました！　最後に両者の健闘を祝って盛大な拍手を！」
闘技場が割れんばかりの拍手に包まれる中、ベルトウェイはブレードを背中に仕舞うと、悔しそうな顔をしているイーリスに向かって言った。
「……もっとマシな稼ぎ口があるだろう？」
「……早急にお金が欲しかったの」
イーリスはそう答えると、僅かに赤みを帯びている長髪を翻し、自分のターンテーブルへと消えていった。
「なお、今回の防衛戦の結果は後日公表となります！　また、勝者であるベルトウェイ選手には多額の賞金が授与されます！　次回も彼らの活躍に期待しましょう！　マイケル磯崎がお送りしました！」

優しい嘘

競技が終わった後、ベルトウェイはヘルスセンターに来ていた。
十日に一度、この病院に行くことが習慣となっている。
ベルトウェイは、馴染みのドクターにゲオルギウスで得た賞金の一部を渡した。
「怪我は？」
「大丈夫だ」
そう返したベルトウェイに、ドクターはため息を吐くと、あらかじめ棚に置いてあった薬を渡した。
「じゃあ俺はこれで……」
「ホリーちゃん、早く良くなるといいな……」
「ああ――ドクターにはいつも感謝してる」
「ああ。よろしく伝えておいてくれ」
ドクターがそう言うと、ベルトウェイは部屋を後にした。扉が閉まるまで、ドクターはベルトウェイから目を離さなかった。

ベルトウェイは自宅に着くと、真っ先に娘の部屋に向かう。
「お父さんお帰りなさい」
「……ただいま」
今年で十八になる娘、ホリーが出迎えてくれた。
「今日は仕事、早かったんだね？」
「……うまくいったんだ」
「そっか」
ベルトウェイは、先ほどドクターから貰った薬を取り出す。
「これが明後日からの分だ」
ホリーはベッドに横になったまま手を伸ばし、それを受け取る。
「うん――でもこれ、凄く高価なんだよね……？」
「お前が気にすることじゃないさ」

「……ありがとう、お父さん」
「ああ。今日はもう寝なさい」
「うん……おやすみなさい」
「おやすみ。ホリー」
ホリーは布団を深く被ると、すぐに寝息を立て始めた。
その様子を見てベルトウェイは微笑むと、ベッドの脇に置いてある椅子に座り、ホリーの寝顔を見つめる。

ベルトウェイには、重い難病に苦しむ娘が居た。
軽い運動でも命に関わるので、ドクターから、家の外には出れないだろうと言われている。また、治療には高価な薬品を使用しなければならなかった。
そのため、ベルトウェイが危険と引き換えに多額の報酬を得られるゲオルギウスに挑戦するのに、そう時間はかからなかった。

静かに寝息を立てるホリーを見ながら、ベルトウェイはその頭を撫でてやろうとする。しかし、寸前で思いとどまり、その手を退けた。
ベルトウェイは、自分に問いかける。
「ホリーは、許してくれるだろうか……？」
ゲオルギウスという競技を行う以上、人を殺めたことが無いとは言えない。
もし、ホリーの病気が完治して、来るべき時が来たときも、自分は笑っているのだろうか。
そうだとしたら、俺は、異常者だ。
しかし……娘の、ホリーのためになら、俺は何にでもなる。
ベルトウェイはそう、亡き妻に誓うのだった。

夫婦

その部屋には、男と女、一人ずつ居た。
女は椅子に腰掛け、男を見ている。男は立ち上がったまま、女を見ている。
男が女に話しかける。
「――お前自身には価値が無い。俺が欲しいのは、今お前が居座っている、そのポストだ」
男はそう言って、視線を机に移動する。そこには、「総務補佐」と書かれたプレートがあった。
「あの子はどうするの？」
「……一人で生きていくさ」
「そう……」
女は諦めた様子で、目を閉じる。
「時間が無い」
男はそう言うと、懐からハンドガンを取り出し、女の胸を撃ち抜いた。
女は、銃声と共に崩れ落ちる。
そこに、誰かが廊下から走ってくる音が聞こえてきた。その音の主は、部屋の扉を慌しく開ける。
息を切らしながら、音の主は、その部屋の状況を理解した。
「――もう、あなたの下では働かない」
「構わない。君に戦略的価値は無い」
「……後悔するわよ」
女は、崩れ落ちた亡骸に向けて、哀悼の意を表するように目を閉じると、部屋を後にした。
男は、最後に亡骸に向けて、言った。
「……心配しなくても、お前の死を無駄にはしないさ」

開戦

ベルトウェイは闘技場にいた。
いつものように控え室に向かう途中、今日の対戦相手が向かい側から近づいて来た。
「――よお」
「……対戦前に相手選手と会うことは、禁じられているはずなんだが……」
「お前と闘えるっていうから、つい挨拶したくなってな」
「準備がある。通してくれ」
そう言って脇を通り過ぎようとする。
すると、左肩を掴まれた。
思わず懐に忍ばせてあるナイフに手を伸ばしたが、マーカスの「まあ落ち着け」という声を聞いて、抑えた。
「今まで俺の相手が死んでったのは、単に『弱かった』からだ。生きる覚悟が少なかった、とも言えるな」
「まあ、一理あるな」
「……あんたはどっちかな？」
マーカスは去っていった。
嫌な相手とあたってしまったな、ベルトウェイは内心そう呟くと、控え室に入った。
ロッカーから装備を取り出すと、ベンチの上に並べていく。銃火器の整備が済むと、空いた箇所に腰を下ろした。
ベルトウェイは時間が来るまで、マーカスへの対策を考えることにした。
今まで見てきた限り、マーカスの試合内容は単純だった。二メートルはあろうかという巨大な刀身を持つブレードで守りを固め、銃火器で相手に接近し、守りから攻めへと転じたブレードで相手を真っ二つにする。

シールドとブレードという違いはあるが、これはベルトウェイの戦い方へと通ずるものがある。ベルトウェイ自身は、単純で基本的なこの戦い方を無意識のうちに選んでいたが、戦っていくうちに臨機応変に立ち回れることに気付いていた。

基本だからこその強みがある。

この闘いは、恐らく生半可ではいかないだろう。

ベルトウェイは装備を身に着けると、ターンテーブルへと移動した。

――久しぶりに相手を殺すことになるかもしれない。

ベルトウェイは、そう感じる。

ゲオルギウスに慣れてからは、なるべく相手を殺さないようにしてきたベルトウェイだったが、今回ばかりはそうは言っていられないようだ。

ターンテーブルに乗ると、観客の歓声が聞こえてきた。

「許してくれ、ホリー」

ベルトウェイは覚悟を決めた。

「さあ今回のゲオルギウスはとんでもないことになりました！　毎回この言葉を口にしていますが今回ばかりは本当です！　ガチです！　なんとあのベルトウェイ選手とマーカス選手の闘いが始まります！　それではそろそろ観客の皆さんが暴れだしそうなので、選手入場！」

ベルトウェイが闘技場のフィールドへと姿を現すと、観客達が一気に盛り上がった。

「今回の主役の一人を紹介します！　身長百八十八センチ！　体重九十五キロの大男！　ベルトウェイ・ゴールドマン！　常に相手選手を生かし続けるベルトウェイ選手ですが、今回はその行いを否定するような選手が現れました！　それでは選手入場！」

そして、相手側のターンテーブルが上昇し、マーカスが現れた。

「紹介します！　身長百九十センチ！　体重九十四キロ！　常に相

手選手を殺め続けた男！　マーカス・レイジ選手です！」
　マーカスの紹介が終わるや否や、ベルトウェイとはまた別の歓声が沸き起こった。
「体格的にも戦績的にも似ているこの二人！　決定的に違うのは性格のみです！　片や、命を預けるルールマン！　片や、命を奪い取るイレギュラー！　似ているようで対称的なこの二人は果たしてどのような激戦を繰り広げてくれるのでしょうか！？」
　ベルトウェイは実況が続いている間、今回のフィールドを見渡していた。
　満天の星空が輝く中、スポットライトの光が交差している。フィールドはコンクリートで出来ており、その中に何本かの円柱が並んでいた。円柱自身は高さが二メートルほどあり、鉄で出来ているようだが、直径が五十センチ程度なので遮蔽物には向いていない。
　つまり、このフィールドでは、純粋に実力同士がぶつかることになる。
　ベルトウェイはマーカスに視線を合わせた。
　同じようにマーカスも、ベルトウェイから視線を逸らさない。
「現在マーカス選手のランクは十三！　打って変わってベルトウェイ選手のランクは十四！　しかも二人は連勝中！　競技規定によりランクアップの条件は『上位ランク保持者への勝利又は三連勝』となっております！　つまりどちらにとってもこの試合は昇格試合となるわけです！　しかもベルトウェイ選手が勝利した場合、両方の条件を満たしたとみなし一気に二つ上のランクに昇格することが出来ます！　このことからも今回の試合が『本気』であることが分かることでしょう！」
　その時、観客席の中から、若い女達の黄色い声援が響いた。
　ベルトウェイは、彼女達が何を言っているか聞き取れなかったが、マーカスに対して強烈な愛情表現をしているらしい。
　しかし、すぐにスタッフらしき男達に取り押さえられたようだ。
　アウトローな選手には変わったファンがつくものだ。

ベルトウェイはそう考え、目の前のことに集中した。
「ルールを説明します！　制限時間は――え？　え、えーと……どうやら観客席から早くしろ！　との声が多数寄せられているようなので……それではスタンバイ！」
スクリーンに「Ｒｅａｄｙ」の文字が浮かび上がる。
ベルトウェイは、体中の筋肉をマーカスに集中させる。
「Ｇｏ」の表示と共に、ベルトウェイはマーカスに向けてアサルトライフルを発射した。
マーカスは背中を向けると、背負っていたブレードで弾丸を防ぐ。
「さあ始まりました！　先手はベルトウェイ選手の銃撃です！」
マーカスは背中を向けたままブレードを外すと、左手で構える。
そのまま右手のサブマシンガンでベルトウェイに銃弾を浴びせた。
ベルトウェイはそれをシールドで防ぐと、今度はアサルトライフルをハンドガンに持ち替えて突撃した。
マーカスはそれに応じるように、襲ってくる銃弾をブレードで防ぎながら、ベルトウェイに突撃していく。
「序盤から激しい闘いになりました！　両選手お互いに距離を詰めていきます！」
マーカスとの距離がゼロになった瞬間、ベルトウェイはハンドガンを捨て、背中のブレードを抜いた。
マーカスもサブマシンガンを手放すと、巨大なブレードを両手で構え、ベルトウェイに斬りかかる。
ベルトウェイは、襲い掛かる刃をシールドで受け止め、右手のブレードでマーカスを斬りつける。
マーカスは巨大な刀身を利用し、ブレードをずらしただけで防いだ。
「これはすごい！　凄まじい展開だ！　まさにこの競技に相応しい闘いです！」
マーカスは、ベルトウェイに渾身の力でブレードを叩きつける。
ベルトウェイはそれをシールドで防ぐが、凄まじい衝撃で後ろに

吹き飛んだ。
マーカスは倒れたベルトウェイに向けてブレードを振り落とすが、ベルトウェイは地面を転がりそれをかわした。
体勢を立て直したベルトウェイは、マーカスに向けて突撃すると、右手のブレードで突きを繰り出す。
それをマーカスがブレードで弾き返すと、今度はマーカスが攻撃を繰り出してくる。
二人のあまりにも壮絶な闘いぶりに、観客は大歓声を上げた。
「今日！　この試合が見れることを私は誇りに思います！　これは確実に歴史に名を残す闘いでしょう！」
お互いに一歩も引かない闘いが続いたが、突然マーカスがブレードの腹でベルトウェイを殴りつけた。
重い一撃を受けたベルトウェイは、一瞬ふらついた後、とんでもない光景を見た。
マーカスがその巨大なブレードで、そばにあった鉄の円柱を真っ二つにしたのだ。
二つに切り裂かれた円柱が、真上に倒れてくるのを確認したベルトウェイは、急いで真横に飛び込んだ。
しかし、倒れてきた円柱をかわしたと思ったのも束の間、マーカスの巨大なブレードが襲い掛かってきた。
右手のブレードを使い、何とか受け止めたものの、ベルトウェイはその巨大な圧力に歯を食いしばった。
必死なのはマーカスも同じようで、ベルトウェイと似たり寄ったりの表情をしながら、再度渾身の力を込めてブレードを押し付けてくる。
ベルトウェイは徐々に押されていくうちに、酸素が足りなくなってきたのか意識が朦朧としてきた。
――今、俺がここで死んだら、ホリーは――
ベルトウェイは腹の底から獣のような怒声を上げると、マーカスのブレードを押し返していく。

マーカスも負けじと押し返すため、凄まじいつばぜり合いが生じた。

そのせいで、上空から真っ赤に燃えた火球が迫っていることに、二人は気付かなかった。

突然、二人は強烈な衝撃によって吹き飛ばされると、地面に転がった。

観客の悲鳴や、緊急アナウンスが鳴り響く中で、ベルトウェイは眩暈に襲われる。

朦朧とする意識の中で、ベルトウェイは何とか立ち上がった。

「……何が起こったんだ？」

周囲を見渡すと、あたり一面火の海になっていた。

観客席や闘技場全体に炎が燃え移っており、場所によっては崩落した部分もあるようだ。さらに炎の爆ぜる音に混じって、街中にサイレンの音が鳴り響いているのに気付く。

「まさか、戦争でも始まったのか？」

「いきなりだな」

その声に振り向くと、いつの間にかマーカスが立ち上がっていた。

「残念だが、この勝負はおあずけだな」

「ああ」

「次の機会が楽しみだ」

そう言うとマーカスは、自分のターンテーブルへと消えていった。

ベルトウェイもホリーの無事を確認するため、避難する観客達と同じく、闘技場を後にした。

宣戦布告

その二日後、ベルトウェイが暮らしている「アエイル公国」は、宣戦布告を受ける。

相手は、先進国である「グラティニス共和国」と呼ばれる国だった。

豊富な水産資源に恵まれていたアエイル公国に対し、グラティニス共和国は「貴重な資源を不当に占領している」と指摘。

アエイル公国の返事を待つことも無く、突然攻撃を開始した。

これに対し、アエイル公国は応戦。

また、両国の開戦を皮切りに、周辺諸国も巻き込まれる形で参戦となった。

当初は拮抗していたアエイル公国であったが、相手が共和国であることを利用し連合軍を築き上げたことや、アエイル自身小国だったこともあり、次第に重要拠点を奪われていく。

その中でアエイル政府は、戦闘に秀でたゲオルギウスの選手達を、多額の報酬と引き換えに戦線に投入することを決意。

また、度重なる戦闘によって失われた人員を補うため、一般人の中から兵士を募集することを決定した。

それは、空戦の主力となる「ドラゴン」も例外では無く、ドラゴンに騎乗する「コマンド」までもが、素人を募集する事態に陥った。

そして、ある片田舎にも募集の手が伸びることになった……。

白銀との出会い（前書き）

Ｅｐｉｓｏｄｅ１までのあらすじ

アエイル公国に住むベルトウェイ・ゴールドマンは、難病に苦しむ一人娘ホリーのために、国民の娯楽競技である「ゲオルギウス」に参加していた。

多額の賞金と引き換えに、選手達に大きな危険が伴うこの競技で、ベルトウェイは挑戦者である少女、「イーリス・サングネイア」に勝利し、見事四十五連勝を飾る。

しかし、ベルトウェイの次の対戦相手は、「マーカス・レイジ」と呼ばれる実力者だった。

マーカスは、自分と闘った相手選手を例外なく殺してしまう、恐ろしい男だった。

激戦を繰り広げるベルトウェイとマーカス。

そして、観客達の興奮も最高潮というときに突如、赤い火球により二人は吹き飛ばされる。

炎に包まれる闘技場。

鳴り響く悲鳴と轟音、そしてサイレン。

二人は、次に会うときが決戦の時と覚悟し、闘技場を後にする。

ベルトウェイはホリーの無事を確認するため、走り出した。

そしてその裏では、大きく時代が動こうとしていた……

白銀との出会い

その街は、朝から騒がしかった。

街と言っても、元が村なので人口は十万人に満たない。しかし、主要な施設や設備、また小規模ながら空軍も所有することから、コマンド募集拠点の候補に挙がった。

そのおかげで、朝から空軍基地に人だかりが出来ている。

「エリートコマンド募集」と銘打たれた貼り紙に、様々なドラゴンが集まったその基地では、広大な敷地内を使い、晴天の屋外で上官らしき男による説明が行われていた。

「――本来、『ドラゴンコマンド』は、一年一ヶ月の訓練を経て正式に認められる。しかし、諸君らも知ってのとおりに事態は急を要する。そこで諸君らは三ヶ月の訓練で全てを学んで貰う」

上官の目の前に広がっていた百人近くのコマンド希望者達が、一斉にざわつく。

「国防を担うにはいささか強引な手段だが、私は諸君らの可能性を信じている。この空で目覚しい戦果を挙げてくれると。勿論、そのつもりで来たのだろう？」

希望者達は口々に答えた。言い分はそれぞれだったが、意味はほとんど同じだった。

「良いだろう。それでは基地内に設置されてあるテントからそれぞれドラゴンを選んでくれ」

希望者達は言われたとおりにテントへと散らばっていった。その中で上官は、ドラゴンの扱いに対する注意を促すため、人混みへと紛れていく。

そのおかげで、無関係な一般人が一人紛れ込んでも気付くことはなかった。

希望者でも関係者でもない一人の青年は、ドラゴン達が容れられているテントを一つ一つ覗き込んで行き、その度に「違うな……」

と洩らしながら確認していく。
　すると青年は突然誰かに、「お主、何をしておる？」と呼びかけられた。
　青年は心臓が跳ね上がる気持ちで振り返る。
　しかし、そこには誰も居なく、テントの中にドラゴンが一匹居るだけだった。
　そのドラゴンは他のドラゴンと異なり、通常は赤や茶色の体色が多い中で、唯一白銀を放っていた。
　思わず、美しい輝きを放つ白竜に見惚れていると、白竜がいきなり「どこを見ている？」と喋り掛けてきた。青年は思わず驚いて声を上げそうになったが、白竜が翼手で口を塞いだため、うめき声しか出なかった。
「静かにしろ……！　たわけが……外の連中に聞こえるような声で喋るでない」
その言葉に青年は頷くと、白竜は青年の口を自由にした。
「――でも……ドラゴンが人の言葉を使って話しているのを見たら、大抵の人は驚くよ」
「まあ、我らが人の言葉を語ることなど皆無だからな」
「でも丁度良かったよ」
「？」
「聞きたいことがあるんだ。今までに黒いドラゴンを見たことある？」
「黒いドラゴン？」
「そう。肩口に傷跡があるんだけど……」
「そのドラゴンがどうかしたのか？」
「昔、黒いドラゴンに助けて貰った事があって、それ以来もう一度会ったらお礼がしたいと思っているんだけど……」
「ほう……しかし、残念ながらここにはそのドラゴンはおらぬぞ」
「……そっか、それは……残念だな」
「……」

「まあでも、教えてくれてありがとう。じゃあね」
「待て」
「？」
「お主、ドラゴンに助けられた、と言ったな？」
「そうだけど」
「ということは、ドラゴンに恩義があるということだな？」
「まあ、そうだね」
「そこでお主に相談がある」
「何？」
「我をここから出してくれぬか？」
「え？」
そこで青年は初めて、白竜の翼手と尻尾に繋がれた鎖に気付いた。
「何で繋がれてるの？」
「頭の悪い上官を侮辱した罪だ」
そう言うとドラゴンは、フンと鼻を鳴らした。
「全く……言葉を話せるようしたのは誰だと思っている？」
「そういえばどうして喋れるんだ？」
「遺伝子操作の影響だ。人間との意思疎通を円滑にするために喋れるようにしたと言っていた」
「他のドラゴンは喋れないみたいだけど……」
「我の代で懲りたのだろう。兵器としての獣は従順な方が一番だとな」
「じゃあ喋れるのは……」
「我だけだ」
そう言い切るとドラゴンは、鎖を揺らした。
「では我の身の上話を聞いたところで、鎖を外してくれ」
「ちょっと待てよ。俺は――」
「ドラゴンに救われたのだろう？」
「それはお前じゃ――」
「黒いドラゴンを知っていると言ってもか？」

「何？」

青年が驚くと同時に、テントの外から「誰か居るのか！？」という怒鳴り声が聞こえてきた。

しかし、青年はそれを無視して白竜を問いただす。

「黒いドラゴンを知っているのか！？」

「鎖を外せば教えてやる。だから早く外すのだ！」

そうこうしているうちに、「侵入者だ！」という声と共に、テントの入り口に足音が近づいて来た。

青年は入り口の垂れ幕を下ろすと、テントを固定するために使う支柱を垂れ幕に突き刺した。

「鎖を外せば教えてくれるんだな？」

その言葉に、白竜は頷く。

青年は一瞬迷った挙句、白竜の翼手と尻尾に繋がれている鎖を外し始める。しかし、白竜から支柱へと伸びている鎖を外すためには、何箇所かに付いている錠前を外す必要があった。

「鍵がないと無理だ！」

「壊せばよいであろう！」

青年はテントの中を見渡したが、錠前を壊せそうな物はどこにも無かった。

テントの入り口では、刃物で垂れ幕を切り裂いている音が聞こえる。白竜はその間も、鎖から逃れようともがいていた。

そこで青年は、白竜が大きくもがく度に支柱が揺れることに気付いた。

「合図したら思いっきり鎖を引っ張れ」

「何？」

「支柱を引っこ抜く」

青年は支柱の根元の地面を手で掘り始めた。

入り口の垂れ幕はほとんど切り裂かれ、何人かの男達が中に入ろうと四苦八苦していた。青年は手を擦り切りながらも、土を掘り続け、やがて支柱の骨組みが丸出しになった時に合図した。

「今だ！」
白竜は思いっきり身体を反らすと、前方に倒した。すると支柱が凄まじい勢いで地上に飛び出し、鎖が支柱から外れた。
同時に、テントの入り口から男達が飛び出してきた。
しかし、白竜が翼を大きく羽ばたかせたため、舞い上がった埃で男達は目を覆う羽目になった。それは白竜を助けた青年も例外ではなく、盛大にむせながら白竜に近付こうとした。
しかし、驚いたことに白竜は青年を尻尾で押しのけ、自分だけ逃げ出そうとしていた。頭にきた青年は白竜の尻尾に跳び付いた。
「放さぬか！」
「ふざけるな！」
白竜は大きく顎を開くと火球を発射し、テントを丸焼きにした。尻尾で振り回されている青年は恐ろしい熱気を感じる。
「熱いだろうが！」
「付いて来るでない！」
白竜はそのままテントを吹き飛ばすと、唖然とする周囲を置き去りにして、颯爽と空に飛び立った。
もちろん、青年も一緒である。
「約束が違うだろうが！」
「あの場で申せと言うのか！」
青年は何とか白竜の背中まで辿り着いた。
「もう良いだろう。早く降ろしてくれ」
「我もそうしたいのだが……」
「？」
急に言い淀んだ白竜を怪訝に思い、振り返ると、空軍基地の方角からドラゴンが三騎（三頭）、追いかけて来ていた。

三騎のドラゴンが迫って来る中、青年と白竜はまだ揉みあっていた。

「早く振り切れ！」

「無茶を言うでない！　……あの三騎、一騎は正規軍であるぞ」

青年は三騎を確認すると、確かに一騎だけ手馴れた動きをしている。逆に言うと、残り二騎の動きはてんでばらばらだった。恐らく、この機に乗じて名を上げようとしているコマンド希望者だろう。

「墜とすしかあるまい」

「出来るのか？」

「なめるでない」

そう言うと白竜は身体を反転させ、追って来る三騎のドラゴンと対峙した。

「本来ならコマンドがレーダーを参考に我に指示を与えるところだが、仕方ない。お主が我の目となれ」

「ちょっと待て！　俺は一体どこに掴まれば――」

「ひよっ子共に空の恐ろしさを教えてやろうぞ！」

青年を無視すると白竜は、いきなりトップスピードで三騎に向かって行く。その間に三騎は散開して、別々の方角から迫って来た。

全力でしがみついていた青年は、白竜の翼手から伸びている鎖に気付き、それを掴んだ。

「あう！」

白竜は驚くと、狙いを定めていた正規軍のドラゴンを見失った。

「何をする！」

「おおう……まるで手綱みたいで丁度良いな」

「良くないわ！」

気付くと、左側から火球が迫っていた。

白竜はそれを平行移動でかわす。

その瞬間、青年は身体中の内臓が全て平行移動したような感覚に襲われた。
「う！」
「吐くでない！　吐くでないぞ！」
白竜は右へ左へと急旋回していく。
そのおかげで青年が吐くことはなかったが、みるみる顔が真っ青になっていく。
「正規軍のドラゴンから目を離すでないぞ！」
白竜の命令におとなしく頷いた青年は、正規軍が騎乗するドラゴンを監視する。その間に白竜はコマンド希望の男が操っている茶色いドラゴンに目掛けて、火球を吐き出した。
パニック状態に陥った男が茶色いドラゴンの翼にしがみついたため、バランスを失ったドラゴンにまともに着弾した。
強烈な一撃を受けた茶色いドラゴンは、そのまま撤退していく。
そこで青年は正規軍のドラゴンがこちらに向けて、火球を放ったのに気付き、急いで白竜に知らせようとした。
が、口を開くと恐ろしいことが起こりそうなので、白竜の頭を叩いて知らせた。
「痛！」
白竜は抗議の急旋回を行おうとしたが、目の前の火球を見て止めた。
そこでまたも平行移動でかわすと、そのまま向かって来るドラゴンに対して宙返りし、上から尻尾を叩き付けた。
正規軍のドラゴンは呻き声を上げると、急いで距離をとり始めた。
白竜はドッグファイトに入ろうとしたが、完全に固まっているもう一騎のドラゴンに標的を変え、雄叫びを上げた。
怯んだコマンド希望者のドラゴンはそのまま撤退していく。
「ふん。他愛ない」
顔が真っ青を越え、紫に進化した青年を従えた白竜は、正規軍のドラゴンを探し始める。

しかし、青年に頭を叩かれるまで、真下から急上昇してくるドラゴンに気付かなかった。
急いで青年が左の翼手から伸びる鎖を引くと、白竜はその勢いで左に急旋回する。そのおかげで、下方から迫る火球に身を晒さずに済んだ。
白竜は体勢を立て直すと、正規軍のドラゴンのテイル（後ろ）に付いて、ドッグファイトに入る。すると正規軍のドラゴンに騎乗しているコマンドから、銃撃を受けた。
「！！」
「身を屈めておけ！」
白竜はぐんぐんドラゴンとの差を縮めて行く。
しかし、コマンドからの銃撃のせいで、決定打を欠いているようだ。
青年は白竜に繋がっている鎖をガチャガチャと動かすと、部品の一部を外して目の前を飛ぶドラゴンに投げつけた。
予想だにしない一撃を受けたドラゴンは、鈍痛のせいで一瞬よろける。
すかさずそこに白竜が火炎放射を浴びせると、正規軍のコマンドと共にドラゴンがゆっくりと落下していった。
「我の火加減に感謝しておけ」
そう言うと白竜と青年は大きく下降し、森の中へと消えていった。

参戦

ベルトウェイは、ドクターと共にホリーの部屋に居た。
「ホリーちゃんは無事だったみたいだね」
「はい、先生」
「まあ、俺の娘だからな」
そう言い切ったベルトウェイにドクターはかすかに笑うが、すぐに暗い表情になった。
「しかし、あの襲撃のせいで、ヘルスセンターが半壊してしまうとは……何とか医薬品だけは持ち出せたが……」
「ドクター、ホリーの薬は？」
「ああ……これで全部だ」
ドクターはそう言うと、懐から薬を取り出した。
「これだけか？」
「そうだ。きっかり二週間分しかない」
ベルトウェイは薬を受け取るとホリーに手渡す。
ホリーの不安そうな顔を見たベルトウェイは、ドクターと部屋から出た。今後のことを話そうと口を開いた瞬間、玄関のインターホンが鳴る。
「誰だ？」
ベルトウェイが玄関を開けると、そこには男が三人立っていた。
一人は仕立ての良いスーツを着込んでいるが、後の二人は軍服だった。スーツの男が名乗り出る。
「こんにちは、ゴールドさん。私達は公国の軍事機関である『アエイル軍事部ゲオルギウス連隊』から参りました。軍から通達が届いているはずですが、ご存知ですか？」
「ああ、知ってる」
「まだ返事を受けていないので、こうして参りました」
スーツの男がそう言うと、ベルトウェイはドクターに尋ねた。

「あの薬は軍にもあるのか？」
「それは……」
ドクターが口ごもると、スーツの男が言った。
「そちらの事情は存じませんが、軍では参戦したゲオルギウスの選手全てに望みの物を渡しています。……ゴールドさん、あなたは実力者が集うゲオルギウスの中でも腕が立つ、軍が欲する人材です。協力は惜しみません」
ベルトウェイは目線をドクターに合わせると、ドクターは諦めたように首を振った。
「分かった。軍には事情を伝えておこう」
ベルトウェイはまだ何か言おうとしていたが、ドクターがそれを遮った。
「ホリーちゃんのことは任せろ」
「……ありがとう、ドクター」
そこでスーツの男が聞いてくる。
「話はまとまりましたか？」
「ああ」
「では、ここから一番近い軍事基地であるコリーナ基地で後ほど」
そう言うと三人の男達は、玄関から出て行った。
準備が出来たらコリーナ基地へと来いということらしい。
ベルトウェイとドクターは部屋に戻ると、今後のことについてホリーに説明した。
「ホリー、これから俺は軍に入隊する」
「え？」
「この前、騒ぎがあったろ？　それは俺達の住む国が戦争を仕掛けられたからなんだ」
「そんな……戦争だなんて……」
「軍に入隊すれば、薬が手に入る。そうすれば当分の心配は無用だ」
「でも！　そしたらお父さんの命が危なく――」
ホリーが全てを言う前に、ベルトウェイはなるべく優しい声音で

言った。
「お前が気にすることじゃないさ」
「……」
「ホリーちゃん。君のお父さんは君が思っているよりずっと強い。それに娘のためになら父親は何だってする。それが普通さ」
ドクターが諭すと、ホリーはすっかり黙ってしまった。
ベルトウェイは今のうちに話を進めた。
「ドクター」
「ああ。私はヘルスセンターの方を復旧させながら、ホリーちゃんの様子を見よう。何かあったらそっちに連絡する」
「分かった」
「それと、昔使っていた大型の無線機がある。それを直せばいつでもこっちと通信出来るはずだ」
ドクターはそれだけ言うと、「じゃあね、ホリーちゃん」と言い残し、ヘルスセンターへと戻っていった。
ベルトウェイはホリーと二人っきりになり、何となく気まずくなった。
――言うべき言葉が見つからない時は、必要なことだけ伝えるべきだ。
そう思い、ベルトウェイは言った。
「今日中に出発する」
「……」
言ってから後悔した。
これではあまりに無味乾燥だ。
「じゃあ……準備があるから、な」
その場を逃れようと扉へ向かったベルトウェイを、ホリーが呼び止めた。
「お父さん」
「ん？」
「……」

無言で訴えてくるホリーを見てベルトウェイは、しばらく待った後部屋を出た。

誰も居ないリビングでベルトウェイは、独り言を洩らす。

「――言うべき言葉が見つからないのはお互い様か……」

腐った上官

「――それで、君はグラティ二ス共和国から来たというんだね？」
「そうです」
「グラティ二スの最高司令官である『総務』の男とも付き合いがあったと？」
「そうです」
「ふむ……それで、君の言い分は何だったかな？」
「く……ですから、そもそもグラティ二ス共和国が貴公のアエイル公国に宣戦布告した理由は、内部クーデターが原因なんです。クーデターが起こる前までは、他国を侵略することについて誰も考えていませんでした。そのせいで我が軍の対応が遅れたのです」
女はそう言い切ると、苛々しながら眼鏡の位置を修正した。
女の話を聞いていたアエイル公国の上官とおぼしき人物は、それを無視して事情聴取を進めていく。
「君の要望をもう一度言ってみてくれ」
「……まず、私の身の安全の確保を。それから上層部と直接話せるようなポストを一つ。後はありません」
「こちらのメリットは？」
「私が確認している範囲でなら、グラティ二ス軍の装備や戦力、今後戦闘が起こりそうな地域、今回のクーデターに参加したメンバーなどをお教え出来ます」
「分かった。もう良いぞ」
「……はい？」
そう聞き返すと同時に、取調室に居た二人の男によって女は連れ出される。
「くっ！　離せ！」
「ラヴィーナ・ミラヴィー君。君にはスパイ疑惑が浮上している。そんな人物に上層部へのポストなど渡せるわけがないだろう」

「グラティニス軍はすぐそこまで迫っています！」
「戦時中に君のような輩は非常に多い。訳の分からない狂言を言って楽に生きようとする輩がね」
ラヴィーナはズルズルと引き摺られて取調室の外に放り出された。
「……後悔するわよ」
ラヴィーナはそう吐き捨てると、アエイル軍総司令部を後にした。

アエイル公国の首都「オルテンシア」の街並みを歩くラヴィーナは、溜め息を吐く。
「――こんなにもに緊張感が無いなんて……」
敵国だからといって期待しすぎたか。
いや、恐らくアエイルは平和ボケしているのだろう。長年争いからは無縁だったせいで。
ラヴィーナは髪を掻き揚げると、その髪を見つめる。
「髪まで染める必要はなかったわね」
茶色に染めたその髪を指で弄んだ時に、ふと、ラヴィーナは思った。
――いきなり総司令部は無理か。
ならどこから入り込めば良いだろうか？
どこから入り込めばアエイル軍を動かせるだろうか？
どこから入れば……あの男を殺せるだろうか？
「まずは小規模な所から攻めるか」
グラティニスを出る前に覚えてきたアエイルの地図を、頭の中で広げる。
「……ヴァルトにも基地があったわね」
アエイル公国の街の一つにヴァルトと呼ばれる田舎町があった。
そしてそこは小規模ながら空軍を保有していた。
――あそこなら、私の話も聞いてくれるかも知れない。
ヴァルトならオルテンシアからマグレブ（磁気浮上式鉄道）で行けばそれほど時間がかからない距離だ。

ラヴィーナは人混みを掻き分けながら駅へと向かった。

森の中の密約

青年と白竜はヴァルト空軍からの追っ手を振り切った後、森の中へ身を隠していた。
日光から覆い隠すように木々が折り重なっている中で白竜は、伸び伸びと翼を伸ばしている。
そこへ青年がこそこそと戻って来た。
白竜は青年が森へ降りた途端、盛大に戻したことを思い出した。
「吐き気はおさまったのか？」
「……多少」
青年は背負ってきたリュックを地面に下ろす。
「街が大騒ぎになってた。凶暴なドラゴンが犯罪者を乗せて身を潜めてるってさ」
「愚かだな。我を助けたばかりに犯罪者扱いされるとは」
「じゃあ俺が愚かで良かったね。そんなことより、早く黒いドラゴンの話をしろよ」
「その前に、ちゃんと持って来たのであろうな？」
青年はリュックの中から鋸を取り出した。
それを確認した白竜は言った。
「鎖を外している間に教えよう」
青年は鋸で白竜の鎖を削り始める。
「我が黒竜を目に留めたのは少し前のことだ。その時は、視界の端に一瞬しか捉えることが出来なかったが、あれは間違いなく黒い体色のドラゴンであった」
青年は黙って鋸で削り続ける。
「……」
「……」
「……？」
「……」

「え！？　それだけ！？」
「それだけだ」
「もっと他にあるだろ！？　居場所とか！」
「ああ、我がその竜を見たのは此処から東の方だ」
「『見た』居場所じゃねえよ！　しかも分かんねえよ！」
青年は鋸を放り投げ、絶望した。
「ああ……訳の分かんねえ情報掴まされた挙句、犯罪者かよ……」
「お主、どうしてそこまで黒竜にこだわる？」
「訳分かんねえ情報寄越しやがって……」
青年はしばらく冷静になれなかったが、何かに当り散らしても結果は変わらないことに気付き、口を開いた。
「俺は昔、いじめられてたんだよ」
「……」
「それである日ヤバい状況になって、その時に助けてくれたのが黒いドラゴンだった」
「……我からしてみれば、それこそ『それだけ？』、なのだが」
「いじめれているのを助けられたのは、それで最初で最後だ」
「ということは……それ以来、いじめられなくなったのか？」
「ああ。ドラゴンを飼ってるって噂が立ってそれっきりだ」
青年は街がある方角を見つめた。
白竜もそれを目で追う。
「それからの人生は百八十度――は言い過ぎだけど、百二十度ぐらい変わった。いじめられるのは無くなったし、友人も増えていった」
「ほう……しかし、いじめられていたとは意外だな」
白竜はそう言って、黒髪短髪の青年を眺めた。
「見た目で判断するなよ。確かに強面だけど別に尖ってるわけじゃないんだ」
「人間は外見で判断するものではないのか？」
「……中身が見れるきっかけが無いんだ。俺のきっかけは黒いドラゴンだった。あれのおかげでよく分からない自信がついて、身体を

鍛えることにも積極的になっていったし、人間関係も悪い方向には、中々向かなくなった」

「中身を知るきっかけか……そう言えばお主の名は？」

「苗字は佐藤木。そっちは？」

「ドラゴンに名は無い。呼ばれる時は兵器番号だ」

「……なんて呼ばれてた？」

「……前の作戦の時は『ライカ１』と呼ばれていた」

「じゃあライカだ」

「好きに呼べ。どうせ鎖が外れたらもう会うことは――」

そうライカが言おうとした瞬間、街のサイレンが響き渡った。

青年と白竜は木々の陰から少し顔を出すと、街の上空に複数の影が揺らめいているのに気付いた。

ライカは納得したように言った。

「三……六……九……それほど多い数ではないな。恐らく地上部隊と連携をとるつもりなのであろう。此処も焼かれるな」

「嘘だろ……」

「お前を馬鹿にしていた連中はまだここに住んでおるのか？」

「多分そうだと思うけど……何で？」

「丁度良いではないか。恐らくその連中は生き残れまいて」

「そうかも知れないけど……俺の友人と家族がヤバいんだよ！」

「まあ、精々努力せい」

ライカはまた森の中へと戻ろうとした。

その瞬間、佐藤木はライカの鎖を引っ張った。

「うぐっ！？　何をする！？」

「手伝ってくれよ！」

「何故我が手を貸さなければならない！？」

ライカは鎖をぐいぐいと引っ張る佐藤木を尻尾で引っ叩いた。

地面に転がった佐藤木は、それでも負けじと鎖を放さない。

「手伝わなかったらお前の鎖は永遠に外れないぞ！　お前はすでに軍から追われているんだからな！　俺以外の一般人に頼んでも逃げ

られるのがオチだ！」
　そこまで言われてライカは、やっと止まる。
「全く……忌々しい奴だ」
「ふう……今回だけだ。街を救ったら、鎖を外してやる」
「その言葉を忘れるでないぞ……それはそうとお主、また我の背中に乗るのか？」
「そのつもりだけど……」
「酔う癖にか？」
「……でも、俺だけ何もしないのはおかしいだろ？」
「ふむ……では、一度ヴァルト空軍に戻ろう。あそこにはコマンド用の装備が置いてあるはずだ。それを使えば微力ながらもお主も戦力になろうぞ」
「分かった。けど、また見つかったら厄介なことになるんじゃないか？」
「我らに構う暇があるものか。それに見つかる前に、お主一人で行けば気付かれにくいであろう？」
「なるほどね。じゃあ、行こうか」
　佐藤木がライカの背中に乗ろうとした瞬間、少し離れた所で爆撃音がした。
「始まっているようだな……急ぐぞ」
　佐藤木を乗せたライカは空へと急上昇し、ヴァルト空軍へと飛び立った。

森の中の密約（後書き）

短編「ＳＫＹ　ＥＡＲＴＨ　～竜と子～」にて、佐藤木と黒竜について記述しています。

進路変更

ベルトウェイはマグレブでコリーナ基地へと向かっていた。
時速五百キロで走るマグレブの客室で、窓の外の砂漠地帯を眺めていたベルトウェイは、車内が少し慌しくなったことに気付く。
ベルトウェイが客室から出ると同時に、車内アナウンスが鳴り響いた。
「お客様に大変ご迷惑をお掛けします。先ほど、ヴァルト空軍基地がグラティニス軍による襲撃を受けました。現在も侵略行為が続いているため、急遽進路を変更致します。コリーナ駅の途中、ヴァルト駅の一つ手前のセルバ駅で停車致します」
「セルバか」
ベルトウェイは納得し、客室に戻ろうとする。
「また、お客様のお呼び出しがございます。ベルトウェイ・ゴールドマン様。至急、お近くの電話室までお越しください。軍事機関の方からお電話です」
自分が呼ばれたことに驚いたベルトウェイだったが、コリーナ基地まで行く人間は一般的にマグレブを利用するので、軍による監視の心配は無いと思った。
ベルトウェイは第二区画に居たので、第三区画との間にある電話室を利用した。
受話器を取ると、聞こえてきたのはスーツの男の声だった。
「ゴールドさん。今からヴァルトに向かってください」
「ヴァルトに？」
「ええ。現在、コリーナ基地からヴァルトに向けて兵士を向かわせています。ゴールドさんは現地で部隊と合流し、そのまま任務にあたって下さい。」
「部隊の数は？」
「地上部隊は四人一組で六部隊です」

「一個小隊（三十人から六十人）もないのか。空からの支援は？」
「ヴァルト空軍が居ます」
「……足りるのか？」
「そのことですがゴールドさん……気を付けて下さい。どうやら本部は増援を送るつもりは無いようです」
「……ヴァルトの規模が、小さいからか？」
「ええ……それと重要拠点がありません。しかも、兵士の人員が足りていない状態です。もうどこにも回す余裕がありません。それに、本部は敵もそれほど攻めて来ないだろうと高をくくっています」
「馬鹿な。ヴァルトの森を占拠されたら厄介だぞ。あそこに対空兵器を隠されたら二度と奪還は出来ない」
「その通りです。しかし……さすがに六部隊では難しいです。ゴールドさんは……頃合いを見て撤退してください」
「民間人を見捨ててか？」
「……仕方ありません。今、あなたを失うことは、我が軍にとって大きな損失となるのです」
「……評価してくれるのは嬉しいが、撤退するかどうかは俺が決めることだ」
「……」
「俺が入る部隊はどうなってる？」
「はい、現在『アース隊』として三人でヴァルトに派遣しています。その他にも『ソイル隊』、『ランド隊』と、コリーナ基地からは三部隊派遣しています。あなたが合流しだい、隊長の命令に従うようにと伝えています」
「……その口ぶりから察するに、隊長は俺か？」
「ええ」
「……」
「不満ですか？」
「……いや、なら今のうちに作戦を練らないとな」
「よろしくお願いします。装備はアース隊に合流すれば渡されるは

ずです」
「ゲオルギウスで使っている『商売道具』なら今ここにあるぞ？」
「方法は構いません。ゴールドさんに任せます。では」
ベルトウェイは受話器を置いた。
「……」
闘いには秀でていたベルトウェイだったが、軍事活動には参加した覚えが無かった。
しかし、自分がヴァルトに辿り着く前に有効な作戦を思いつかなければ、味方全員が危険に晒されてしまう。
マグレブがセルバ駅に到着すると、ベルトウェイはヴァルトの街並みが描かれている地図を購入し、入念に考察してからヴァルトに向かった。

大敗からの奇襲

ライカは佐藤木を乗せて、ヴァルト空軍の真上を飛んでいた。
「全滅だな」
「……」
佐藤木の眼下には、あちこちで未だに炎が燻っている空軍基地が広がっていた。至る所で人間やドラゴンの死体が転がっている。
佐藤木は思わず目を背けた。
「お主、人間の死体を見るのは初めてか？」
「爺ちゃんや婆ちゃんが死んだ時以来だよ」
「ふむ……おっと、そろそろ見つかってもおかしくない頃だ」
ライカは佐藤木を空軍基地の敷地内に降ろした。
「良いか？　『レーダー』は巨大な腕時計のような形をした機材だ。恐らく人間の死体が持っているであろう。『フレア』（欺瞞）はベルトに発炎筒のような物が複数巻かれている。これも人間が持っている。ただし、『熱感知式ミサイル』は倉庫にあるかもしれない。形は見ればすぐに分かる。それと基地の管制塔から通信機材を持ってくるのだ。『ヘッドセット』と『無線機』だぞ。後は出来れば『ゴーグル』と『手袋』だ。初心者には必要なものだ」
「分かった」
「用意出来たらこの場所で拾ってやる。お主の姿が見えたら我の方から出向く」
佐藤木は頷くと、早速走り出した。
ライカは周りを見張るため、空軍基地の周辺を高度を下げて旋回することにした。

しばらく経つと、ライカの目に街を襲撃し始めるドラゴン達が映った。
「やはり空を完全に支配されたようだな」

ライカは空軍基地の建物の影に隠れた。
街を占拠した後、奴らは必ずここに戻って来る。ライカがそう思った矢先、一騎のドラゴンがこちらへと向かって来た。
ライカはドラゴンに乗っているコマンドを確認すると、服に赤い紋様が見て取れる。
「グラティニス軍か。戦果の確認でもしに来たか？」
それと同じくして、合流地点にのこのこと佐藤木が現れた。
「あの阿呆……！　確認してから出て来いというのに……！」
ライカは合流地点へと急いで向かう。
しかし、敵のコマンドも佐藤木の存在に気付いたようで一気に下降して来た。
「ミサイルを使え！」
ライカは佐藤木にそう指示すると、佐藤木は頷いてミサイルランチャーを敵のドラゴンに向けて構える。
すると、ドラゴンは佐藤木に向けて火球を発射した。
ライカも火球を発射し、佐藤木の頭上の火球を相殺する。
二匹のドラゴンの間に凄まじい爆煙が発生し、その中からミサイルが飛び出して敵のドラゴンに着弾した。
叩き落とされたドラゴンに向けてライカはさらに火炎放射をぶつけ、もう一度火球を発射した。
ほとんど炭と化したグラティニス軍のコマンドとドラゴンを尻目に、ライカは着地した。
「早く乗れ」
「……」
「街を救いたいのであろう？」
佐藤木は無言でライカの背中に乗った。
「必要な物は揃えたな？」
「ああ」
ライカは首を曲げて佐藤木を見る。
左腕にレーダー機材を取り付け、手袋とゴーグルを身に着けたう

えで、ヘッドセットをかけている出で立ちだった。
「なかなか様になっているな」
「でも俺は何をすれば良いんだ？」
ライカは街へと向けて飛び立つ。
「コマンドが行うことは三つだ。一つは騎乗するドラゴンの操作。二つ目はレーダーやフレア、入ってくる通信などを駆使し敵を発見、回避することだ。そして三つ目は我と共に敵を墜とすことである」
「ミサイルを使うのか？」
「銃火器も使え」
「持ってきてない……レーダーの見方は？」
「緑の光点が味方で、赤の光点が敵性だ」
「赤の光点が八つだ……」
「一騎は先ほどのドラゴンだったな……しかし、八騎を同時に相手にするのは愚の骨頂。建物の影から一騎ずつ奇襲するぞ」
「了解」
ライカと佐藤木は、八騎の動きに集中した。

合流

アース隊はソイル隊とランド隊と共に、ヴァルトの東から攻めてくる地上部隊と交戦していた。

「隠れろ！」

アース隊の一人がそう叫ぶと、他の部隊全員が近くの建物に隠れる。

その瞬間、空からいくつもの火球が降り注いだ。

崩れかけた建物の中で、アース隊の一人が言う。

「これじゃあまともに戦えない……」

ランド隊の一人も言う。

「あのドラゴン達を何とかしないと……対空兵器は無いのか？」

ソイル隊の男が答える。

「この街にあるやつは全部破壊されてる」

「そうか……くそっ、釘付け状態だな」

そう言った矢先に銃弾が飛んできた。

「伏せろ！」

頭上を銃弾が掠めていく中、ソイル隊が飛び出して行く。その後にアース隊が続いた。

前方の瓦礫から、何人ものグラティニス軍兵士が進撃してくる。

アース隊の男はアサルトライフルで弾幕を張ると、近くの物陰に隠れた。すると、横からグレネードランチャーの弾頭がグラティニス軍に向けて放たれる。おかげで五、六人の敵兵が吹き飛んだ。

ソイル隊の男が思わず唸る。

「やるなあ！」

アース隊の男が言った。

「よし。あいつを基点にしてこのまま防衛すれば――」

男がそう言い終わる前に、南から銃声が鳴った。

建物の影から乗り出してアサルトライフルを連射していたランド

隊の男が倒れた。男が南の方角を見ると、街のバリケードを突破した敵軍の地上部隊が自分達に向かって押し掛けて来ていた。

「下がれ！」

アース隊の男が叫ぶ。

三部隊は建物の奥へと戻ろうとしたが、奥からも敵が現れた。アース隊の一人がそのまま敵を排除しようと蹴りを見舞おうとしたが、押し返されてナイフを向けられる。

回避しようと地面を転がるが、追い付かれてナイフを突き立ててきた。思わず目を瞑り、来るべき衝撃に対して構える。

しかし、いつまで経っても身体に痛みが走らない。

アース隊の一人は目を開けた。すると、さっきまで自分にナイフを下ろそうとした相手は地面に倒れていた。

後方で銃声がしたので振り向くと、茶髪の大男が敵兵をなぎ倒していた。

その男の動きは俊敏で、縦横無尽に敵兵を打ち倒していく。時には背中のブレードで、時には銃器や素手で打ち倒すその姿は、人間では無く獣を思わせた。

他の三部隊も突然の乱入者に戸惑いを隠せない。気付くと、その場に立っているのは乱入者と三部隊だけだった。

アース隊の男は、はっとしたように持っていたアサルトライフルを乱入者に向けて構えた。

「誰だ！？」

乱入者である大男は素直に手を上げた。

「俺は敵じゃない」

「名前は？」

「ベルトウェイ・ゴールドマン」

「ベルトウェイだって？」

ベルトウェイが名乗った瞬間、ソイル隊の男が反応した。

「あんた、まさかゲオルギウスで有名なあのベルトウェイか？」

「ああ。コリーナ基地に向かう途中で命令を受けて、此処に来た」

「じゃあアース隊の空いた席に入るのって……？」
「ああ。俺のことだ」
それを聞いたソイル隊の男が沸き立つ。
「やったぜ！　これで一気に戦力が増えた！」
しかし、アース隊の男が反論した。
「おいちょっと待てよ！　いきなりこいつのことを信用して良いのかよ！？」
「良いも何も……俺達を助けてくれたじゃねえか？」
「罠かも知れないだろう！」
「味方殺してまでか？　そりゃ無いね」
「よく考えろ能無し！」
「何ぃ！？」
「お前ら落ち着いてくれ！」
アース隊の一人が二人を止めようとした時、アース隊の女が言った。
「信じるかどうかは別として、戦力にはなるんじゃない？」
「何だと？」
アース隊の男が女に突っ掛かろうとした時、ベルトウェイは気付いた。
「イーリス？」
「……」
「何だ？　あんた達、知り合いなのか？」
「ああ……少しな」
ベルトウェイは言葉を濁しながら、ソイル隊の男に聞いた。
「他の部隊と連絡出来るか？」
「ああ、この無線を使えば――」
「おい待て！」
アース隊の男が無線を取り上げる。
「何すんだ！」
「こいつが味方かどうかもわかんねえだろ！」

「まだそんなこと言ってんのか！」
「信用しなくていい」
ベルトウェイが言ったその言葉に全員が黙った。
「俺は別行動を取る。南側の敵を抑えるから、他のを頼む」
そう言うと一人で建物に囲まれた道路を進んで行く。
「待て！」
アース隊の男がそう言うと同時に、イーリスがベルトウェイの後を追う。
「おい！」
「……何？」
「何じゃない！　どこに行く！？」
「私は生き残れる方に行くだけ」
イーリスはそう言うと、瓦礫の奥へと消えた。
「ったく、どいつもこいつも……」
アース隊の一人が、苛々している男に言う。
「向こうが二人で、こっちが一人だから、俺はこっちだな」
「……ふん」
アース隊の男はどうでもよさそうに鼻を鳴らすと、ソイル隊の側まで戻った。
「俺達は敵が来たら倒すだけだ」
アース隊とソイル隊はその場をランド隊に任せ、東側へと向かった。

ベルトウェイはイーリスに聞いた。
「ヴァルト空軍はどうした？」
「全滅」
「……」
ベルトウェイは予測していたとはいえ、改めて言われると自分達が苦境に立たされていることに気付いた。
「敵の地上部隊は？」

「二個小隊」
「航空部隊は？」
「九騎……だったけど、さっき確認したら八騎だった」
「墜としたのか？」
「違う。一騎、空軍基地の方に向かったきり、戻ってこない」
「ヴァルト空軍の生き残りが墜としたのか？」
「それは無い。ヴァルト空軍にそんな度胸のある奴はいない。あいつら敵兵が攻めてきた瞬間、ほとんどがビビッて動いてなかった」
「アース隊とさっきの二部隊以外はどうしてる？」
「それぞれ北と西を守ってるけどヤバイみたい」
「民間人は？」
「ほとんどが避難した」
「だとすると、後は俺達だけか」
「手助けしてくれるのは良いけど、何も考えてないってことは無いよね？」
「ああ」
ベルトウェイは適当な建物に隠れ、地図を広げた。地図に所々印が付いている部分をイーリスに説明する。
「この印は街の中で一際高い建物を示している。このビルの正面に敵兵を集めるんだ」
「どうして？」
「ビルを爆破する」
「は？」
イーリスが驚いていると、遠くでドラゴンが羽ばたく音が聞こえてきた。
ベルトウェイはイーリスを誘導し、建物の奥へと隠れる。
「ビルなんか爆破しても、巻き込まれる敵の数なんかたかが知れてるじゃん」
「ただ爆破させるだけじゃない。爆薬をビルの中と外に分けて設置して、正面に倒れるように仕掛ける」

「敵を押し潰すってこと？」
ベルトウェイは頷いて、外の様子を見る。
「うまく倒れるの？」
「爆発物に関しては、君の方が詳しいんじゃないか？」
イーリスは持っているグレネードランチャーを見つめながら思案した。
「――十分な爆薬があればいけると思うけど……ただ、爆薬を持っているのは私達じゃなくて、北にいる他の部隊」
「連絡出来るか？」
「私の無線機からは無理」
「なら直接取ってくる。君は印を付けたビルに行って、一階にある支柱や鉄骨、爆薬を効果的に仕掛けられる場所を把握してくれ」
「それは良いけど……空にいる奴らはどうするの？」
「そうだな……」
ベルトウェイが悩んでいると、突然外から爆音が響いた。
イーリスと外に出てみると、上空でグラティニス軍のコマンドを翻弄している、一騎の白いドラゴンが見えた。
「あれって……」
「今のうちだ」
ベルトウェイは北に向かって走り出した。
イーリスも地図を手に取ると、印に向かって駆け出した。

呼び掛け

管制塔の中は、突然の襲撃により滅茶苦茶になっていた。
おかげでラヴィーナは管制室を見つけるまで、横倒しになった機材やデスクを何度も跨ぐ羽目になった。
「火事場泥棒になるけど……」
ラヴィーナは管制室の扉を開けると、使えそうな資料や機材を探した。
これで軍の上官が必要とする書類などを見つけることが出来れば、良い取引材料になるかも知れない。
ラヴィーナは避難した上官が間抜けなことを祈りながら、火花が散っている管制室を歩き回る。その途中で、ヴァルトの街に展開しているアエイル軍を表示したレーダーを見つけた。
「ひどい有様ね……」
レーダーに表示されたアエイル軍は、東西南北全てに配置されたグラティ二ス軍によって完全に包囲されていた。西や北にいるアエイル軍はほぼ壊滅状態で、残りも申し訳程度にしか配置されていないほどの戦力だった。おまけに動きもてんでばらばらである。
「上官に恵まれなかったようね」
他人事のように考えていたラヴィーナだったが、頭の中では自然とアエイル軍の戦略を立て直していた。
まず、空軍基地のある西側に地上部隊を集結させて隊列を立て直してから、向かってくるグラティ二ス軍を編成させた陽動部隊で……。
そこまで考えてラヴィーナは、暴走した思考を停止させた。
「……これはもう、職業病ね」
レーダーを無視し、捜索を再開しようとした時、突然設置されていた通信機が鳴った。
「――えるか？　こちらグラウンド隊、敵地上部隊の攻撃で壊滅寸

前だ！　今すぐ援軍を送ってくれ！」
　ラヴィーナは無視することに決め、デスクの上の資料に目を通す。
「お願いだ応答してくれ！　もう誰も居ないのか！？」
　最初は無視して読み進めていたが、結局ラヴィーナは資料を投げ捨てて応答した。
「……こちらヴァルト空軍基地管制塔」
「良かった、通じたか！　こちらグラウンド隊、敵部隊の攻撃により防衛線が破られそうだ！　一度後退して態勢を整えたい！　合流ポイントを指示してくれ！」
　自然とラヴィーナの目は、レーダー上でグラティ二ス軍のいない安全地帯に動いていた。
「了解、後退を許可する。次の合流ポイントは南西の角にある百貨店だ」
「了解！　後退する！」
　そこで通信が途切れた。
　ラヴィーナは自嘲した。
「何をやってるの……私は」
　グラティ二ス軍が来る前にここを出るつもりだったラヴィーナは、レーダーから目を離せないでいた。すると、レーダーのあるデスクの端に書類が置かれていることに気付く。調べてみると、ヴァルト空軍基地に配備されていた地対空ミサイルの、有効射程距離測定の結果が記されていた。
　ラヴィーナは歓喜した。
「まだ間に合う……！　急いで書類をまとめて、敵に見つからないようにヴァルトから出れば――」
　そこで途切れた通信機が再び鳴った。
「――こちらランド隊！　グラウンド隊からの通信により、そちらがまだ機能していることを報告されました！　お願いです！　増援を送ってください！　ランド隊は既に壊滅寸前です！　繰り返します！　壊滅寸前です！　俺達は――」

そして通信が途切れた。
ラヴィーナは動けなかった。身体は出口の方向を向いているのに、心はさっきの無線の主に囚われたままだった。
このまま出口に向かうべきか。
それともレーダーの場所に引き返すべきか。
ラヴィーナは、出口へと、足を進めた。
そして、一瞬だけ、レーダーが表示されたパネルへと目を戻した。

ランド隊がいたはずの緑の光点が、全て消えていた。

遅かった。
全ては遅かったんだ。
ラヴィーナはそう自分に言い聞かせ、管制室を後にしようとした。
唐突に、通信機が鳴った。
「――管制塔へ、ソイル隊から報告！　現在、アース隊二名と共に敵を北西にあるビルに誘導中！　また、アールデ隊とアース隊一名による『ルーメンビル倒壊作戦』を進行中！　こっちはまだ諦めちゃいねえぜ！」
ラヴィーナは思った。
このまま管制室を出れば、まだ安全にヴァルトを出ることが出来るだろう。そうすれば早い段階で、アエイル軍の上層部に書類を渡すことが出来る。そして身分を隠して近付けば、恩赦で軍に入れるかもしれない。
そうすれば、あの男にまた一歩近づける。
そうすれば、ヴァルトにいるアエイル軍はまた全滅の危険に晒される。

ラヴィーナは、レーダーのパネルへと、急いで戻っていた。

見捨てることは簡単だ。

だがそれでは、あの男のやり方と変わらない。
あの男と同じ道を歩んで勝ったところで、何も変わらない。
私は別の道を選んで歩み、同じ場所に立ってやる。
そして、必ずお前の息の根を止めてやる。

ラヴィーナは、ヴァルトで戦っている全アエイル軍に対して呼び掛けた。
「全軍へ、こちら管制塔。聞こえるか？」

邂逅

「無線が入ったぞ！　一旦止まれ！」
アールデ隊の隊長が移動している隊員達を呼び止める。
無能な上官のおかげで、単独で北で交戦していたアールデ隊に「ルーメンビル倒壊作戦」を伝えたベルトウェイは、二つ返事で承諾したアールデ隊をルーメンビルまで誘導していた。
ベルトウェイは隊長の持っている無線機に耳を澄ますと、若い女の声が聞こえてきた。
「――こちらヴァルト空軍管制塔。先ほど入った通信をキャッチした。『ルーメンビル倒壊作戦』の内容を報告せよ」
隊長はさっそく作戦内容を伝えようとしたが、ベルトウェイが目で合図し、止めさせた。
「……どうした？」
「……最後に管制塔から通信があったのは、どれくらい前だ？」
「……三時間前だ」
「……今まで音信不通だった管制塔が突然、連絡を寄越してくるのはおかしい。無線機を貸してくれ」
無線機を受け取ったベルトウェイは、通信相手に尋ねた。
「こちらアース隊。まずそちらの状況を知りたい。一時間前から通信が途切れていたが、大丈夫か？」
「問題ない。今は落ち着いている」
「そちらの責任者は？」
「私だ」
「他の職員は？」
「関係者以外は避難した」
「いつ避難したんだ？」
「二時間前だ」
「……最後に通信があったのは三時間前だ。その間は何をしていた

んだ？」
「……」
「お前は誰だ？」
「軍人よ」
「そこで何をしている？」
「あなた達を助けようとしている」
「アエイル軍なのか？」
「違う」
「じゃあなぜだ？」
「……分からない。でも敵じゃない」
「信用できない」
「信用しなくて良い。ただ、あなた達が敵の位置を把握しないで作戦を遂行するのは無理よ」
「……」
「……大丈夫、本当に敵じゃない。危険を承知で私がここにいる時点で、あなたも気付いているはず」
「……分かった。何て呼べば良い？」
「……本名は言えない。だから、そのまま『管制塔』でお願い」
「分かった管制塔。作戦内容を伝える」

「右から近付いてくる！」
「ミサイルを使うのだ！」
佐藤木を乗せたライカは、ヴァルトの上空で八騎のドラゴンから逃げ回っていた。幸い敵のドラゴンコマンドの実力は高くないようで、八騎に囲まれながらも何とか翻弄していた。
「こんな状態じゃミサイルを使えない！」
「こんな状態で使うのがミサイルなのだ！」
ライカは相手のドラゴンが火球を放ってきたのに対して、急旋回して回避した。
「もう振り落とされそうだ……！」

「ここまで時間を稼げば十分であろう。恐らく地上部隊が何かしらの作戦を進めているはずだ」
ライカは最高速度で、敵編隊との距離を引き離した。
「吐きそうだ……」
「降りてからにして欲しいのだが……」
その時、ヘッドセットから若い女の声が聞こえてきた。
「――こちら管制塔。聞こえるか？」
一瞬返事に困ったが、今更逮捕は無いだろうと思い佐藤木は応答する。
「……はい、聞こえます」
「貴官の所属は？」
「……アエイル軍です」
「ヴァルト空軍の生き残りか？」
「……そうです」
「そうか。では『ルーメンビル倒壊作戦』のことは聞いているか？」
「いいえ」
「では、今から参加してもらいたい。作戦内容は追って伝える」
女はそう言うと、唐突に通信を切った。
佐藤木が複雑な表情を浮かべていると、ライカが言った。
「今、我らに策は無い。ならばその女のいう『作戦』に乗るのが、今、お前の街を救う手段なのだろう？」
佐藤木は静かに頷いた。

作戦開始

ルーメンビルに辿り着いたアース隊の二人は、ビルの一階にいたイーリスと合流した。

一階にある支柱部分についている印を横目に、アース隊の男がイーリスに尋ねる。

「無線で聞いたが、この作戦もベルトウェイとかいう男の案らしいな。まったく……どうしてあの男を信用してるんだ？」

「信用してるわけじゃない。少なくとも、あんたよりは頼りになるってこと」

「この……！」

「まあまあ」

暴れだしそうになったアース隊の男を、もう一人の男が抑える。

その様子に呆れたイーリスは、未だに見えない敵兵とソイル隊について聞いた。

「ソイル隊は？」

「作戦通り、グラティニス軍の陽動をしているよ」

「分かったから放せ！」

押さえつけていた男が放すと、アース隊の男は手で服を払った。

「ふん……それで？　肝心の爆薬係はどこにいるんだ？」

「ここにいる」

イーリス達がビルの入り口を見ると、ベルトウェイが大量の爆薬を抱えて立っていた。

「チッ……」

残念そうに舌打ちしたアース隊の男を無視して、もう一人の男がベルトウェイに尋ねる。

「アールデ隊は？」

「一足早く、ビルの外側に爆薬を仕掛けに行った」

「他の二部隊は？」

「全員、敵部隊の陽動に回っている」
ベルトウェイはそれぞれに爆薬を手渡し、アールデ隊から受け取った無線機を取り出した。
「俺は管制塔に作戦準備が整ったことを伝える。三人は一階の支柱にそれぞれ爆薬を設置してくれ」
「了解。任しとけ」
「分かった」
一人を残して後の二人は、爆薬を設置しに行った。
「作戦には乗ってやる。でも、お前を信用したわけじゃない」
それだけ言うと、もう一人も渋々動き出した。
ベルトウェイはアサルトライフルを構えながら入り口に移動すると、まだなんとか日が昇っている外を警戒しながら管制塔に連絡を入れた。
「こちらアース隊。現在、ルーメンビル一階の内側と外側から、それぞれ爆薬を設置している。アールデ隊とソイル隊はルーメンビル正面に敵部隊を誘導中だ。また、他の二部隊に関しても同じだ」
「――了解、アース隊。その様子で行くと敵部隊の到着は五分後の予定だ」
「了解。爆薬を設置次第、待機する。また、先ほどからランド隊と通信が取れないんだが、何かあったのか？」
「……アース隊へ、ランド隊は既に全滅している」
「……了解」
「……しかし、嬉しいニュースもある。ヴァルト空軍の生き残りである一騎のドラゴンとコマンドが、作戦に参加した」
「……ということは、敵の航空部隊に少なからず抵抗できるのか？」
「敵騎は全部で八騎だ。例え一騎ずつだとしても墜とすことは難しいが……敵の目を地上部隊から逸らすことは恐らく可能だ」
「了解。通信を繋げられるか？」
「ああ、大丈夫だ、今から繋ぐ。それでは、三……、二……、一……、いいぞ」

「こちらアース隊、聞こえるか？」
「――聞こえます。地上部隊ですか？」
「そうだ。『ルーメンビル倒壊作戦』の内容は聞いているな？」
「はい」
「それでは貴官に指示を与えたい。大丈夫か？」
ベルトウェイは無線機から、かすかに話し声が聞こえた気がした。
「――大丈夫です。お願いします」
「……感謝する。それでは今から五分後、貴官には敵の航空部隊である八騎のドラゴンをなるべく引き付けておいて欲しい」
またもや無線機から、話し声が聞こえてきた気がした。
「――了解。どのくらい引き付けておきますか？」
「引き付けておける限界までだ。無茶を承知で頼む」
「……分かりました。やってみます」
「ありがとう……それと最後に質問だが、貴官は今『一人』か？」
「……ええ、まあ」
「……そうか、分かった。それでは五分後に頼む」
相手の無線機の反応が無くなると、今度は通信が切り替わった。
「――通信は終わったか？」
「ああ」
「これで全部隊に作戦は伝えた。後は……成功を祈るだけだ」
「ああ、しっかりサポートを頼む」
「任せておけ」
通信が切れると同時に、アース隊の三人とソイル隊が戻ってきた。
「外は範囲がでかいから時間が掛かっちまったが、無事に終わったぜ」
「中も終わった。最悪、起爆装置がダメになっても倒壊させられるように、一箇所爆破すれば誘爆するように設置したよ」
「ご苦労だったな。ではこれから、ビルの側面にそれぞれ移動する。ソイル隊はビルの正面から右へ、俺達は左側に位置する。敵部隊が正面に集まるまで防衛するぞ」

「了解だ！」
ソイル隊は早速移動を開始した。
「俺達も行こう」
「ああ」
「分かった」
「……」
相変わらず返事の無い者が一名いたが、段々と銃声が近付いてくるベルトウェイにとって、構っていられなかった。
無線機を取り出すと、ソイル隊に呼び掛けた。
「どうやら五分も経たないうちに来そうだ。全員、戦闘態勢に入れ」
「もう入ってるさ！　左は任せろ！」
ソイル隊の言葉を聞いて、アース隊も戦闘態勢に入った。
イーリスは後方でグレネードランチャーを構えて、残弾の確認をする。
アース隊の二人の男も、アサルトライフルを構えてそれぞれの位置に着いた。
ベルトウェイは背中のブレードを抜くと、二、三振り回して感触を確かめた。
管制塔からの無線が入る。
「全部隊へ、各自戦闘隊形を取ったな？」
丁度その時、前方で爆音が鳴った。
ベルトウェイはブレードを背中に仕舞い、アサルトライフルに持ち替えて強く握り締めた。
――これが終わったら、まずはホリーを安心させてやらないとな。
「それではこれより、『ルーメンビル倒壊作戦』を開始する」

Ｍｉｓｓｉｏｎ０１：Ｒｅｖｅｎｇｅ　ｏｎ　Ｗａｌｄ（前書き）

Ｍｉｓｓｉｏｎでは司令官の声を≪≫で囲んでいます。

Mission01：Revenge on Wald

建物の影からアールデ隊が飛び出してくると、アース隊は一気に躍り出た。
意外にもさっきまでベルトウェイに反抗していた男が、先陣を切って叫ぶ。
「後退する場合はビルの正面にしろ！　側面には行かせるなよ！」
そのまま男が、アールデ隊を追跡していた敵兵に銃弾を浴びせる。
「街路樹の陰に隠れて戦え！」
もう一人の男はそう言うと、陽動作戦を完了したアールデ隊を物陰まで誘導した。
アールデ隊と行き違いになったベルトウェイは、構えていたアサルトライフルで追いついてきた敵兵をけん制し、コンクリートの遮蔽物に身を隠した。
「イーリス、援護を頼む」
イーリスが頷いたのを確認したベルトウェイは、物陰から飛び出した。
背中のブレードを抜いたと同時に、目の前の敵が吹き飛ぶ。左腕のシールドで敵兵の銃弾を防ぎながら、イーリスが撃ち漏らした敵をなぎ払っていく。
しかし、いくら敵兵を倒しても次から次へと迫ってきた。
「下がれ、ベルトウェイ！」
いつの間にかアース隊の男がアールデ隊の誘導を完了し、前線まで戻っていた。
男の言うとおり、ベルトウェイがビルの入り口近くまで戻ると、ソイル隊と他の二部隊が合流していた。ソイル隊は負傷した陽動部隊の隊員をビルの側面まで引っ張っていた。
「ソイル隊を援護しろ！」
ベルトウェイが叫ぶと、アールデ隊の隊員達が突撃してくる敵部隊

に銃弾を浴びせた。ベルトウェイも弾幕を張っていると、無線機に管制塔からの通信が入った。

≪――全部隊へ告ぐ、敵部隊がビル周辺に集まっている模様。背後を取られる前に作戦を実行せよ≫

先陣を切っていたアース隊の男が叫んだ。

「こんな状態じゃ無理だ！」

イーリスも今回ばかりは同調した。

「今は作戦を忘れて守りを固めるしかない！」

ベルトウェイも賛成し、無線機で全員に呼び掛ける。

「アース隊から全部隊へ！　直ちにビル正面に集結せよ！　正面玄関にて敵を迎撃する！」

アース隊がビルの入り口に向かって走り出すと、無線機から応答が聞こえた。

「ソイル隊、了解！」

「アールデ隊、了解！」

アース隊が入り口に辿り着く頃には、ビルへと続く石畳の階段を何百人もの敵兵が駆け上がってきていた。

「アース隊、入り口を死守する！」

アース隊の男二人は、駆け上がってくる敵兵をアサルトライフルで迎撃する。イーリスは後から来る他の部隊のために、グレネードランチャーで階段を確保していた。

ベルトウェイは上空を気にしながらも、無線機で管制塔に通信を入れた。

「こちらアース隊、ビル一階の正面玄関に集結した。他の部隊はどうなっている？」

≪アース隊へ、ソイル隊とアールデ隊はまもなくそちらに着く。他の二部隊は……壊滅した≫

「くっ……！　……管制塔へ、敵の飛行部隊はどうしている？」

≪現在、味方のドラゴン一騎が注意を引いている。なんとか逃げ回っているようだが、出来れば援護が欲しいと先ほど通信が入ってい

る≫

「了解、善処する」

ベルトウェイは管制塔との通信を切ると、他の二部隊へと連絡した。

「こちらアース隊、誰か地対空ミサイル又は熱感知式ミサイルを所持しているか？」

「――こちらソイル隊、こっちは誰も持ってねえ！」

「――アース隊へ、こちらも所持していない！」

「……了解、続けて合流を急いでくれ」

ベルトウェイが物陰に隠れ、敵兵をけん制しながらも必死考えていると、イーリスから無線機に通信が入った。

「――対空用じゃないけど、ロケットランチャーならある。このビルの高さなら、屋上から撃てばもしかしたら当たるんじゃない？」

ベルトウェイはビルを見上げた。

「……そうだな、試してみる価値はありそうだ。……よし、イーリス、ロケットランチャーを貸してくれ。一階は頼んだぞ」

「任せて」

ベルトウェイはイーリスが投げたロケットランチャーを掴むと、一階のエレベーターに向かって走った。

すると突然、肩に激痛が走る。

見てみると、銃弾が掠めていったようで、鎖骨のあたりまで血が滴っている。ベルトウェイは急いで振り向くと、敵の狙撃兵が自分の額を狙っていた。一瞬、脳裏にホリーの姿が思い浮かんだが、狙撃兵は真横から銃撃により突然倒れてた。

見ると、ソイル隊とアールデ隊がアサルトライフルで敵部隊に銃撃を加えていた。

「ソイル隊、アールデ隊と共にアース隊と合流！　イーリスから話は聞いているぜ！　一階は任せな！」

ベルトウェイは頷くとエレベーターに乗り、屋上へと急いだ。

ライカは背後から迫ってくる火球を、紙一重で避けていた。
「――我の腕の感覚が無くなって来た……お主、早く発射せぬか！」
「分かってる！」
佐藤木は後ろ向きでミサイルランチャーを構えていたが、発射したのは相手が先だった。
「ミサイルだ！」
ライカは急いでミサイルを回避し、戻ってきたミサイルは佐藤木が振りまいたフレアで撹乱された。
「後どのくらい逃げられる……！？」
「もって三分だ……！」
ライカがそう唸ると、前方に敵のドラゴンが現れた。
「まずい！　挟み撃ち――」
佐藤木がそう言いかける前に、前方のドラゴンが何かによって爆破され、撃墜された。
佐藤木達が唖然としていると、無線機に地上部隊であるソイル隊から、通信が入った。
「――もう良いぞ、十分だ！　後はすぐに離脱してくれ！」
「……了解！」
「まったく、一時はどうなるかと思うたが……ん？　あれは……」
ライカの視線の先には、ルーメンビルの屋上があった。佐藤木はライカの視線を追うと、屋上でこちら合図を送っている男が見えた。その男はすぐにビルの中に消えてしまったが、ライカは確信した。
「恐らく、あの男が先ほどのドラゴンを墜としたのだろうな」
「うん……」
佐藤木が納得し、前に振り向こうとしたその時、真横を火球が通り過ぎていった。
「ふん！　まだ相手をして欲しいようだ」
「追っかけて来ているのは一騎みたいだ……墜とそう」
「ほう、お主も言うようになったか……良いだろう！」
ライカは旋回し、敵のドラゴンの正面を取った。

「準備は良いか！？」
「大丈夫！　行け！」
佐藤木がミサイルランチャーを構えると、ライカがそのまま突っ込んでいく。
相手のドラゴンも、正面から体当たりしてきた。
ライカが火球を発すると、相手のドラゴンも火球を発射し相殺した。コマンドが発射したミサイルを、佐藤木はフレアで撹乱する。
すれ違いざまに佐藤木は、ミサイルを発射した。
ほぼゼロ距離で発射されたミサイルを、相手のドラゴンは避けきることが出来ず、そのまま着弾しヴァルトの街へと墜ちていった。
「……」
「……良くやった。我はお主を褒めて遣わそう」
佐藤木の無線機に管制塔から通信が入った。
≪――こちら管制塔、よくやってくれた。戦闘空域を離脱してくれて構わない≫
佐藤木はその命令通り、ライカと共にルーメンビルの空域から離脱した。

「ベルトウェイはまだか！？」
アース隊ら三部隊は、ビルの入り口に陣取って敵部隊の猛攻を防いでいた。
それぞれが限界を感じていたその時、全部隊の無線機にベルトウェイから通信が入った。
「――聞いてくれ、今から一階の裏口から一部隊ずつ脱出しろ。先に起爆装置を持っているアールデ隊から行かせるんだ」
無線を聞いていたアールデの隊長が聞き返す。
「分かった。でも、あんたは？」
「俺は最後に脱出する。全員が脱出次第、起爆するんだ」
「了解、脱出を開始する！　あんたも死ぬなよ！」
隊長は無線を切ると、ソイル隊とアース隊に言った。

「悪いが先に行かせてもらうぞ！　ビルの裏で会おう！」
イーリス達が頷くと、アールデ隊は一階の奥へと消えていった。
アース隊の男が入り口付近に迫ってくる敵兵をナイフで突き刺しながら、ソイル隊に告げた。
「次はあんた達だ！　俺達は最後に出る！」
「……すまん！」
ソイル隊は負傷した隊員に肩を貸しながら、裏口へと後退して行く。
「さて、後は俺達だが……」
アース隊の一人は、エレベーターの方を見ながら言い淀んだ。
「放っておけ！　遅れてくる奴が悪いんだ！」
そう言うと男は、押し寄せてくる敵兵に銃弾を浴びせて後退していく。
イーリスともう一人の男も、ベルトウェイの心配をしながら裏口へと走った。　背後から嵐のように銃弾が放たれる中、アース隊は裏口の扉を開け放った。
アールデ隊の隊長がイーリスに聞いた。
「ベルトウェイは？」
「まだみたい……でも、そろそろ起爆しないと敵兵が来る」
「くそっ！」
ソイル隊はそう吐き捨てながら、起爆装置を見つめた。
アース隊の一人が、祈る思いで裏口を見る。
「頼む……！　早く来てくれ……！」
その思いが通じたのか、通じていないのか、ベルトウェイから通信が入った。
「――早く起爆しろ！」
「何言ってんだ！　あんたが来ないと出来るわけ無いだろう！」
「今、全速力で向かっている！　いいからやれ！」
「……くそっ！」
アールデ隊の隊長は全員の顔を見てから、ベルトウェイの言葉を

信じ、起爆装置のボタンを押した。

ベルトウェイは四方八方から迫ってくる銃弾をシールドで防ぎながら、全速力で裏口に向かっていた。

≪――早くしろ！　敵に追いつかれるぞ！≫

「分かってる！」

裏口の扉に体当たりをする勢いで走っていたベルトウェイは、突然周囲の空気が歪むような感覚に襲われた。

気付いた時には、目の前が真っ白になり、何も聞こえなくなっていた。

ビルの外にいた三部隊は、轟音を立てながら倒壊していくルーメンビルから全速力で距離を取っていた。

「走れ！」

隊長が叫びながら、負傷したソイル隊の隊員を担いで運んでいた。

イーリスはある程度距離を取ってから、ビルの方向を振り返った。

そこにはさっきまで戦っていた面影は無く、閑散とした瓦礫が残っているだけだった。

「……死んじまったのか？」

「……」

全員が静まり返っている中、静寂を破ったのは銃声だった。次から次へと銃弾が飛んできたため、全員は遮蔽物の陰に隠れた。

アース隊の一人が叫ぶ。

「一体なんだ!?」

ソイル隊が確認すると、赤い戦闘服がちらほらと見えていた。

「あいつら、まだ生きていたのか!?」

そこに全員の無線に管制塔から通信が入る。

≪――全部隊へ告ぐ！　敵勢力は今だ残存している模様！　繰り返す！　敵勢力は残存している！≫

アールデ隊がアサルトライフルで応戦した。

「戦闘態勢に入れ！」
イーリスは残された弾薬を自分のポーチから出そうとした時、一瞬瓦礫の山が動いた気がした。
そのままイーリスは瓦礫を注視していると突然、瓦礫の中からロケットランチャーの弾頭が飛び出してきた。
それはそのまま敵勢力のど真ん中に着弾し、爆発した。
全員が敵と交戦しながらも瓦礫を見守っていると、何事も無かったの如くベルトウェイが這い出してきた。
ベルトウェイはそのまま味方の陣営に戻ること無く、敵の残存勢力に突っ込んでいく。
アース隊の一人も、物陰から飛び出してベルトウェイに続いた。
「残滅するぞ！」
それに続いて三部隊は、敵の残存勢力を徹底的に駆逐した。

敵を残滅した後、一箇所に集まった三部隊の中で、アールデ隊の隊長がベルトウェイに聞いた。
「あんた、無敵なのか？」
「ああ」
「『ああ』って……まったく、とんでもない奴だな。あんたを見てるとうちの無鉄砲なガキ共を思い出すよ」
「子供のためになら、あんたも無敵になれるさ」
「ああ……まあ、な」
ベルトウェイは無線機で管制塔に通信を入れた。
「こちらアース隊、敵勢力を全滅した」
≪了解、確認したアース隊。ヴァルト空軍に帰還せよ。これにて『ルーメンビル倒壊作戦』を完了する……あなた、生きてたの？≫
「ああ」
≪そう……まあ生きてて何よりよ。それと、ヴァルト空軍の生き残りも来るみたい≫
「分かった。二十分程度でそっちに着く」

ベルトウェイ達は空軍基地へと向かった。

逮捕

ヴァルト空軍に到着した三部隊を待ち受けていたのは、アエイル軍の地上部隊だった。

当然のように近付こうとしたアールデ隊に、アエイル軍の銃口が向けられる。

「お、おい！？　味方に銃口を向けるんじゃねえよ！」

驚いた三部隊に対して、指揮官らしき男が言った。

「黙れ。お前達に用があるわけじゃないんだ。実は空軍基地に犯罪者が居てね……そいつらを捕まえるために出向いたんだ」

「犯罪者？」

ソイル隊が聞き返すと、ベルトウェイが屋上で見た白いドラゴンと若い男がアエイル軍に拘束されていた。

ベルトウェイは男に問いただした。

「あいつらがどうかしたのか？」

「男の方が白いドラゴンの脱走の手助けをしたんだ。あのドラゴンは、上官への侮辱罪で捕らえられていたのさ」

アース隊の一人が言った。

「でも、あいつらは俺達の手助けをしてくれたぜ？　それなのにあの扱いは無いんじゃないか？」

「知るか。俺達は上の命令に従っただけさ」

若い男は、アエイル軍の地上部隊によってコリーナ基地へと護送されていった。ドラゴンの方も、航空部隊によって厳重な監視を付けられたうえで、基地へと飛び立っていった。

「納得いかねえな……」

アース隊の一人がそう呟きながら、アスファルトの上にある小石を蹴飛ばした。

「お前達もご苦労だったな。司令部からコリーナ基地への帰還を命じられている。後は、俺達に任せて帰れ」

「……ふん」
アース隊の男は一人で先に、ヴァルト駅へと向かっていく。
「それじゃあ、ここでお別れだな」
アールデ隊はそう言うと、アース隊とソイル隊の隊員達それぞれと握手を交わし、空軍基地へと消えていった。
そこでアース隊の一人は気付いた。
「そうか……アールデ隊はヴァルトの部隊だもんな……」
ソイル隊も難しい顔をしながら言った。
「ヴァルトの復興が大変だな……」
イーリスもそう感じていると、ベルトウェイは一人で管制塔に向かって歩き出した。
「ベルトウェイ？」
「俺は用が済んだら基地に戻る」
そう言うとベルトウェイは、近くに居たアエイル軍の女性兵士に聞いた。
「管制塔の中にもアエイル軍はいるのか？」
「ええ。既に生存者の捜索は終了し、今は壊れた設備の復旧をしています」
「その生存者の中に、若い女はいなかったか？」
「いえ……既に避難した者を除き、生存者は一人も見つからなかったと聞いていますが……？」
「……分かった、ありがとう」
女性兵士が基地の奥に去っていく中、ベルトウェイは空へとそびえ立つ管制塔を見つめた。
――あの女は一体、何者だったのだろうか？
ベルトウェイはコリーナ基地へと戻る前に、マグレブでボスケットに寄っていた。
ベルトウェイにとってボスケットは地元であり、ホリーとドクターが待っている帰るべき居場所だった。

自分の家に着く寸前で、近くのスーパーから出て来たドクターと鉢合わせになった。
「無事だったのか！？」
「ああ」
「ヴァルト空軍で戦っていたそうだな？」
「どうしてドクターがそれを？」
「……実は、修理した無線機を使って、アエイル軍の無線を拾っていたんだ」
「そんなことが出来るのか？」
「趣味の一環でね。私の大型無線機は元々、アエイル軍が所有していた物なんだ」
「なるほど……ホリーは？」
「心配するな、元気でやってるよ」
「……そうか。ドクター、薬の件についてはどうなった？」
「心配しなくても、きちんと軍から提供されている。私がホリーちゃんに毎回渡すようにしているから、長期の任務があっても大丈夫だ」
「……分かった。俺が今頼れるのはドクター、あんただけだ」
「気にするな。お互い様さ」
ドクターは皺の重なった深みのある顔をくしゃくしゃにして笑うと、ヘルスセンターへと帰っていった。
ベルトウェイも自分の家をしばらく見つめてから、玄関を開けてホリーの部屋の扉を開けた。
父親の突然の帰還にホリーは驚いて、横にしていた身体を急いで起こした。
「お父さん！？　大丈夫だったの！？」
「ひどいな、ホリーは。俺が大丈夫だと嫌なのか？」
「そんなわけないでしょ！　……肩、怪我してるし」
「ああ、後で治療してくれ」
「うん」

ベルトウェイはホリーの側にある椅子に座って、「商売道具」が入ったバッグを下ろした。
「薬はしっかり飲んでいるか？」
「うん……軍隊の方は大丈夫なの？」
「コリーナ基地に戻れといわれたが、ここでしばらく休憩だ」
「……大丈夫なの？」
「仕事よりお前が大事だ」
「……」
ホリーはそっけなく顔を逸らしたが、小声で「ありがとう」と呟いた。

暗雲

グラティニス軍の司令部では、最高司令官の補佐である「総務補佐」の男が作戦会議を進めていた。

小ぢんまりとした作戦室の薄暗い照明の中、数名の男女が静かに話を聞いていた。

「――以上で、グラティニス軍の内部調査報告を終了致します」

補佐の男はそう言い終わると、アエイル全土が記された地図が置いてある机から離れた。

椅子に座って逞しい鬚を撫でている高齢の男が言う。

「クーデターはうまくいったようだな」

その言葉に、「総務」と書かれたプレートの前に座っている男が頷いた。

「軍内部の反対派の一掃も終わった。これでこれからは、アエイル軍との戦闘に集中することが出来る――ジャン」

「はっ」

補佐の男が総務の男に近付いた。

「ゲオルギウスの選手達はどうなっている？」

「はい。アエイル軍の地上部隊との戦闘にあたらせています。いずれも上位ランク保持者をグラティニス軍に引き込むことに成功しました」

「そうか。彼らの戦力的価値は高い。報酬は滞りなく受け渡すようにしろ」

「了解しました」

そこで、腕組みをしながら壁に寄りかかっていた女が机に近付いてきた。

その若い女の、流れるように美しい長髪は金色に染まっており、肌理の細かい白い肌は薄暗い室内でもかなり目立っていた。きっちりと結ばれた口元や、美しく弧を描く眉とモデルのように高い鼻は、

抜群のプロポーションとあいまってこの世のものでは考えられないほどの美貌をかもし出している。

しかし、見るものを射抜く鋭い眼光のお陰で、ただの美女ではないことが分かる。

「これまでの抵抗を見る限り、アエイル軍の司令部は無能だ。ならば戦争を長引かせないためにも、ここは一気に首都を叩くべきだ」

「確かにその意見もあるな。ではモルテ中佐、オルテンシアまでの道をどう切り開く？」

モルテはアエイル軍の重要拠点を一つ一つ指していく。

「まずはオルテンシアから一番近い都市であるプラテリアを落とす。そのためにはプラテリア周辺に配置された防衛網を破る必要があるがな。しかし、それさえクリアしてしまえば、首都の電力供給を担っているプラテリア発電所を抑えることが出来る。そうすれば――」

そこでモルテの後ろについていた少年が引き継いだ。

「ライフラインである発電所を盾にされ、アエイル政府は首都を明け渡すことを余儀なくされる……」

「そうだ」

「さすがです、姉さん」

そう言うと少年は尊敬の眼差しでモルテを見つめた。

絶世の美女である姉を持つ弟だからか、この少年も信じられないほどの美少年だった。唯一違うところは、姉であるモルテが金髪であるのに対し、弟である少年の髪が雪のように白い銀髪であることだ。

モルテは気付かないように少年の表情を盗み見ると、僅かに目元を和らげた。

高齢の男が頷く。

「わしもモルテ嬢の意見に賛成だ。戦争は長引くほど被害者が出る。それに首都を制圧するのに、戦わないことに越したことは無い」

総務の男は全員の顔を見た。

「俺も同意見だ。では、モルテ中佐の提案を採用――」

そう言い終わる前に、作戦室の扉が開かれた。
グラティニス軍の兵士が一礼する。
「報告します。ヴァルトを制圧しに向かった我が部隊が返り討ちにあい……全滅した模様です」
「……そうか、分かった。もういいぞ」
「はっ」
兵士が去っていくと、総務の男はアエイルの地図を見直した。
「残念だったな……ヴァルトの森は、対空戦力を置くのに丁度良い隠れ蓑になったんだが……」
「……噂によると、アエイル軍側の選手がヴァルトにて我が部隊と交戦していたようです」
「そうか……やはり俺の戦略眼に狂いは無かったようだな」
総務の男は、地図から顔を上げると命令を出した。
「モルテ中佐、弟であるルイン少佐と共にアエイル軍の各発電所を制圧しろ。引き続き航空部隊の排除も頼む」
「了解した」
「イゴール大佐はプラテリアまでの道のりにある全ての拠点、地上部隊を頼む」
「老体に鞭打つか……任せろ」
「俺はアエイルにある主要都市と重要拠点の制圧に向かう。プラテリアに攻め入る時が来たら、また召集する。以上、解散」

作戦室から出た後、モルテはルインの手を握って司令部の廊下を一緒に歩いていた。
「あの……姉さん……？」
「ん？　なんだ？」
「……どうしていつも僕の手を握ってくるんですか？」
「恋人同士なんだから当たり前じゃないか」
「いつから恋人同士になったんですか！？　それと僕達は姉弟です！」

ルインがそう言うと、モルテはよく分からないといった表情をした。
「姉弟だと、どうして駄目なんだ？」
「え？　え、えーとそれは、その……と、とにかく駄目なものは駄目なんです！」
「そうか……よく分からないものだな」
ルインは溜め息を吐きながら宿舎に着くと、自分の部屋に入ろうとした。
しかし、それと同時にモルテまで部屋に入ろうとして来た。
「何してるんですか！？」
「お前の部屋に入ろうとしている」
「駄目です！」
「なぜだ？」
「だ、だからそれは……僕は男で、姉さんは女だからです！」
「男って、まだ十七じゃないか」
「立派な大人です！」
「私にとっては可愛い弟だ」
「子ども扱いしないで下さい！」
ルインは勢いよく扉を閉めた。
モルテは含み笑いをこらえながら、扉の向こうでそっぽを向いているであろうルインに向けて言った。
「悪かった、許してくれ」
「……」
「ルイン、ここを開けてくれ。お前の顔が見たい」
「……」
「……扉にキスすれば開けてくれるか？」
「止めて下さい！」
ルインは扉を開け放った。
「姉さん、あんまり大騒ぎするのは止めて下さい。ここの人達はみんな朝早いんですからね……」

「そうか、それは悪かったな。でも恋は障害があるほど燃え上がるものだろ？」
「……早く寝てください、姉さん」
「おやすみのキスは？」
「失礼します！」
今度こそ扉は開くことは無かった。

秘められた思い

モルテは自分の宿舎へと静かに歩き出すと、ルインのことを思いながら溜め息を吐いた。

モルテ自身、近親者同士の恋愛が禁じられていることは分かりきっていることだった。あくまでさっきの会話は冗談を楽しむためのものである。恐らくルイン自身はそう思っているのに違いない。しょうがない姉だなと感じながら。

しかし、モルテは本気だった。

未だに真剣に自分の本心を打ち明けたことはないが、ルインのことを男だと認識しているのに間違いはなかった。最初は自分の感情に戸惑ったが、後からなぜもっと早くから意識しなかったのかと思うほどになっていた。

「私は……異常なのか？」

――どうしてルインは自分の弟として生まれてきてしまったのだろうか？

自分の気持ちに気付いた時ほど、神を呪ったことは無い。

ルインとは、永遠に結ばれない――

「いや、私は諦めないぞ」

あっさりとそう言い切ったモルテは、意気揚々と自分の部屋に入った。

弟に恋をしてはいけないと誰が決めた？

私は必ずルインと結ばれる運命なのだ。

絶対に、必ず。

「恋は障害があるほど燃えるもの、だろ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1323z/

SKY　EARTH

2011年12月24日10時49分発行